

元総社蒼海遺跡群（130）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019. 3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群 (130)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 9 . 3

前橋市教育委員会



1 区DB-1号土壤墓全景（南西から）



2 区DB-1号土壤墓全景（東から）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは元総社・元総社地区に山王廃寺、國府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（130）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野國府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、國府そのものに関連する遺構の検出、確認はかないませんでしたが、古墳時代から古代の住居跡や中世蒼海城の堀跡等が検出されました。蒼海城の縄張りは近年の発掘調査に伴って、徐々にその姿を見せていますが、全貌は未だ確認されていません。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成31年3月

前橋市教育委員会
教育長 塩崎政江

例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（130）埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名　　元総社蒼海遺跡群（130）

調査場所　　群馬県前橋市元総社町1392-9 ほか

遺跡コード　　30A238

監理指導　　並木史一（前橋市教育委員会）

発掘・整理担当　　佐野良平（技研コンサル株式会社）

発掘調査期間　　平成30年9月10日～平成30年10月31日

整理・報告書作成期間　　平成30年11月1日～平成31年3月21日

3 本書の原稿執筆はIを並木、他を佐野が担当した。

4 発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子（技研コンサル株式会社）

安藤三枝子　飯塚美奈子　河本ちさと　北爪二郎　桑原　襄　設樂和男　杉田友香　曾根　裕　田所順子
中嶋智恵子　南雲富子　西湯　登　樋田　環　細野竹美　村田稔男　吉田俊宏

5 本書における図面、写真、遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

6 下記の諸氏・諸機関にご指導、ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

吉田智哉　山下工業株式会社

凡　　例

1 押図中に使用した北は座標北である。

2 押図に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、堅穴住居跡：H、道路跡：A、溝跡・堀跡：W、墓：DB、土坑：D、ピット：Pである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　住居跡・道路跡・溝跡・堀跡・墓・土坑・ピットほか・・・1/30、1/60

全体図・・・1/60、1/100

遺物　土器・陶磁器・・・1/3、1/4　瓦・・・1/6　鉄・銅・石製品・・・1/1、1/2　古錢・・・1/1

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

6 遺構図・遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺物実測図・・・須恵器：■　灰釉陶器：■

目 次

はじめに

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
地理的環境	
歴史的環境	
III 調査方針と経過	8
調査箇所と基本方針	
調査経過	
IV 基本層序	9
V 遺構と遺物	13
VI 発掘調査の成果と課題	35

挿図目次

Fig.1 遺跡の位置	1
Fig.2 前橋の地形	2
Fig.3 周辺遺跡図	3
Fig.4 周辺調査地点とグリッド設定図	7
Fig.5 基本層序	9
Fig.6 1区全体図	10
Fig.7 2区全体図	11
Fig.8 3区全体図	12
Fig.9 1区南側調査区	14
Fig.10 1区H-1～3号住居跡	15
Fig.11 1区周辺の舊海城に関連する堀（1）	16
Fig.12 1区W-1号堀	16
Fig.13 1区DB-1号土壤墓 P-2号ピット	17
Fig.14 1区H-1～3号住居跡出土遺物	17
Fig.15 1区DB-1号土壤墓・遺構外出土遺物	18
Fig.16 2区H-1号住居跡、W-2号溝、DB-1号土壤墓、P-1号ピット（1）	20
Fig.17 2区DB-1号土壤墓	21
Fig.18 2区H-1号住居跡、W-2号溝、DB-1号土壤墓、P-1号ピット（2）	21
Fig.19 2区W-1号堀、A-1号道路跡	22
Fig.20 2区DB-1号土壤墓・遺構外出土遺物	22
Fig.21 3区W-1号堀	23
Fig.22 3区土坑	24
Fig.23 3区ピット（1）	24
Fig.24 3区ピット（2）	25
Fig.25 3区ピット（3）	26
Fig.26 3区W-1号堀出土遺物	26
Fig.27 3区土坑・ピット・遺構外出土遺物	27
Fig.28 3区遺構外出土遺物	28
Fig.29 1区DB-1号土壤墓木棺推定復元図	35
Fig.30 1区周辺の舊海城に関連する堀（2）	36
Fig.31 2区周辺の舊海城に関連する堀	37
Fig.32 3区周辺の舊海城に関連する堀	37

表目次

Tab.1	周辺遺跡一覧表	4
Tab.2	土坑・ピット計測表	29
Tab.3	出土遺物観察表	31

写真図版目次

PL.1	1区北側調査区全景、1区南側調査区全景	
PL.2	1区H-1号住居跡全景、1区H-1号住居跡No.1出土状況、1区H-2号住居跡全景、 1区H-2号住居跡粘土塊全景、1区H-3号住居跡全景	
PL.3	1区W-1号堀北側部分、1区W-1号堀全景、1区DB-1号土壤墓全景、1区DB-1号土壤墓釘出土状況	
PL.4	2区H-1号住居跡全景、2区H-1号住居跡全景、2区W-1号堀全景、2区W-2号溝全景、 2区DB-1号土壤墓全景、2区A-1号道路跡全景	
PL.5	3区調査区全景	
PL.6	3区調査区全景、3区W-1号堀遺物出土状況、3区W-1号堀全景、 3区D-3号土坑、P-29・57号ピット全景、3区D-6号土坑遺物出土状況、 1区調査風景、2区調査風景、3区調査風景	
PL.7	1・2区出土遺物	
PL.8	3区出土遺物	
PL.8	3区出土遺物	

参考文献

- 秋本太郎2005「上野と周辺地域との関係－在地土器の分布論から探る－」「海なき国々のモノとヒトの動き－16～17世紀における内陣部の流通－」内陣道路研究会
秋本太郎2008「戦国初期開拓のかわらけ」「中世東国の大世界3 戦国大名北条氏」高島書院
秋本太郎2012「上野の16世紀から17世紀前半のかわらけ」「江戸在地系カワラケの成立（発表要旨）」江戸道路研究会
木津博明1989「上野国の於ける在地生産時に就いて－上野国分懇寺・尼寺中間地域を中心にして－」「中近世時の基礎研究V」日本中世土器研究会
群馬県理歴文化財調査事業団1986「南里長久保古道跡」
群馬県理歴文化財調査事業団1987「下東西道路」
群馬県理歴文化財調査事業団1988「田畠道路」
群馬県理歴文化財調査事業団1988「鳥羽道路 I・II・K区」
菊川市教育委員会1999「『盆地道路』」
津金洪吉茂2009「古代の墓制」「群馬県史」通史編原始古代2
富岡市教育委員会2016「よみがえる！とみおか 富岡市内出土品展」展示解説冊子
奈良国立文化財研究所1997「平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告」奈良国立文化財研究所学報第56号
沼山雅吉治1981「土御門合口妻棺墓について－東日本における諸例を中心に－」「考古学雑誌」第66巻第4号：日本考古学会
東吾妻町教育委員会2018「岩槻城跡」
東日本理歴文化財研究会1995「東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－」第5回東日本理歴文化財研究会
福田 誠1988「千葉寺地区鷺谷津道路B地区において検出された合口妻棺墓について」「研究通鑑」22 公益財團法人千葉県教育振興財團文化財センター
藤岡市教育委員会1982「A1塚／内蓋跡群」
宮城県教育委員会2014「山王道路Ⅳ」
柳澤和明2012「多賀城の墓制」「考古学研究」第58巻第4号：考古学研究会
山形県理歴文化財センター2006「上野道路」

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、20年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成30年4月4日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年4月19日及び20日に試掘確認調査を実施した結果、遺構が検出され、工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。同年6月4日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することになった。同年9月7日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(130)」（遺跡コード：30A238）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「(130)」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

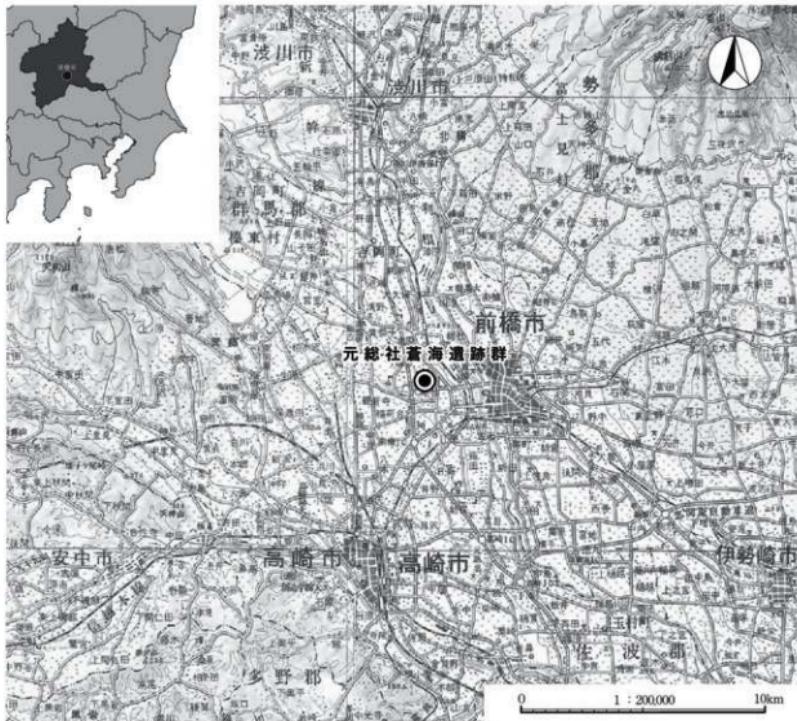


Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

地理的環境 (Fig. 1) 元総社蒼海遺跡群 (130) は、前橋市街地から利根川を隔て西へ約 36km の地点、前橋市元総社町地内に近接して所在する。遺跡地の西側には関越自動車道が南北に、南側には国道 17 号、北側には主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に、また東には市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。

遺跡は、榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地端部と前橋台地との移行地帯に立地する。遺跡周辺には、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛池川、染谷川が流れている。これらの河川の開析作用によって細長い微高地と低地が多く形成されており、その比高差は 3~5m を測る。遺跡が立地する周辺は主に畑地として利用されていたが、前橋市中心部から続く市街地の西端にあたり、近年では元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって宅地や商業施設が立ち並び、市街地化が拡大している。

歴史的環境 (Fig. 3・Tab. 1) 本遺跡が所在する元総社地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連続と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡周辺地域における時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

(1) 織文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東 [15]・産業道路西 [16]、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分寺・尼寺中間地域 [22]・元総社小見三遺跡 [59]・元総社蒼海遺跡群 (24) などが挙げられ、堅穴住居跡が確認されている。本遺跡でも織文時代前期から中期にかけての遺構を確認している。

(2) 弥生時代 日高遺跡 [18]・[19]・上野国分寺尼寺中間地域 [22]・正観寺遺跡 [21] などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では浅間 C 軽石下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。

(3) 古墳時代 本遺跡周辺は県内でも有数の古墳密集地域であり、それを代表するものとして総社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳 [7]・総社二子山古墳 [12]・愛宕山古墳 [10]・宝塔山古墳 [13]・蛇穴山古墳 [8] などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺 [4] が建立され、総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王庵寺は昭和 3 年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49~56 年にかけて 7 次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」題書の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成 9~11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成 18~19 年度調査では北・東・西面、平成 20 年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成 21 年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成 22 年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術に



Fig. 2 前橋の地形



Fig. 3 周辺遺跡図

よるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。

この時代の集落は牛池川と染谷川に挟まれた台地上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、元総社明神遺跡、元総社北川遺跡、総社閑泉明神北IV・V遺跡などで水田跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域に約900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔14〕では県下最大級の掘立柱建物跡が検出され、元総社蒼海遺跡群（99）、上野国府等範囲調査確認28・33・34トレンチでは掘込地業を持つ建物跡が、元総社蒼海遺跡群（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。元総社寺田遺跡〔43〕では「國府」・「曹司」・「國」・「邑尉」などの墨書き土器や人形が出土している。元総社明神遺跡〔24〕では南北方向の溝跡、閑泉橋遺跡〔25〕や元総社蒼海遺跡群（7）・（9）・（10）では東西方向の溝跡が確認され、国府域の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面鏡や綠釉陶器、巡方（腰帶具）なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和55年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・塀垣・堀等が確認されている。また、平成24年度から28年度にかけての第2期発掘調査において、これまでの金堂が講堂であったことが判明する等、伽藍配置の変更が行われている。国分尼寺は昭和44・45年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査團により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の塀垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成28年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成29年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡〔20〕で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域〔22〕では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。また、近郊にはN・64°・E方向に東山道（国府ルート）が、日高遺跡〔19〕では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。

当該期の一般的な集落は、古墳時代と同様に牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。近年の調査による元総社蒼海遺跡群（40）で8世紀後半の住居跡内の一角に鍛冶遺構が検出されている。元総社蒼海遺跡群（41）では9世紀後半の鍛冶工房が検出され、同遺跡からは金の付着した灰釉陶器や奈良三彩といった貴重な遺物が出土している。また、元総社蒼海遺跡群（64）では8世紀前半には廃続されたと考えられる製鉄炉跡（箱型炉）が1基、元総社稻葉遺跡〔47〕では10世紀に想定される製鉄炉跡（小型自立炉）が2基確認されている。

(5) 中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海域を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海域の堀跡が多く検出されており、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は諂訪・秋元氏が蒼海域に入り当地の領主となるが、慶長6年（1601年）に秋元長朝が總社城に移ると同時に蒼海域は廢城となった。また、当該期の周辺遺跡では大渡道遺跡〔71〕の貨幣理納遺構から572枚におよぶ銭貨が捲紐を通して「縦」の状態で六綴出土している。

Tab.1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	元総社北川遺跡〔130〕	11	鬼出山古墳	21	正則寺遺跡Ⅰ・Ⅱ	31	今井遺跡
2	上野国分寺跡	12	柴根二子古墳	22	上野国分寺跡・尼寺中間地帯	32	大神遺跡・笠置跡
3	上野国分尼寺跡	13	文坂山古墳	23	正光寺跡	33	対馬遺跡・笠置跡
4	牛山堀跡	14	火薙村小学校前遺跡	24	元総社明神遺跡Ⅰ・Ⅱ	34	猪俣遺跡
5	鬼出山古墳〔未定〕	15	鬼出山古墳遺跡	25	御見付遺跡	35	鬼出山古墳・笠置跡
6	日高遺跡〔未定〕	16	達生遺跡西北部	26	火木寺跡・Ⅱ遺跡	36	伊川遺跡
7	牛山古墳	17	中ノ原遺跡	27	豊作山遺跡	37	村前遺跡
8	船穴山古墳	18	日高遺跡	28	鬼筑山古墳	38	六九井遺跡
9	福寿山古墳	19	日高遺跡	29	鬼筑山古墳跡	39	照野分塚跡・Ⅱ・Ⅲ遺跡
10	乗石山古墳	20	鳥居遺跡	30	元光院遺跡Ⅰ・Ⅱ	40	村東遺跡
						41	志幸寺御内北跡・Ⅱ遺跡
						42	早瀬寺遺跡
						43	元祐寺御内跡Ⅰ・Ⅱ
						44	佐助寺跡・Ⅰ・Ⅱ遺跡
						45	田代山遺跡・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡
						46	大間敷遺跡・Ⅰ・Ⅱ
						47	元祖寺・稻葉遺跡
						48	三川口山遺跡
						49	上野川今井遺跡跡
						50	元気山古墳遺跡

番号	道路名	調査年度	時代：主な遺跡・出土遺物
1	越後湯原町北五番町	2002 - 2004	古墳・水路網・貝塚
2	越後湯原町北五番町	2004	古墳・水路網・廃瓦・平安・住居跡
3	田代福道跡	1993	古墳・田代跡・廃瓦・平安・大溝
4	田代福山遺跡	1995	古墳・住居跡・◇帆船車
-	元麻糸社北川遺跡	2002 - 04	城内～外部の河岸、吉積・住居跡、赤川跡。粘土探査坑、田尻河、平安・住居跡、獨立柱建物跡、浜源。中世以降：獨立柱建物跡、赤川跡・火葬場、城文土台（城壁）、浜上道（城壁）、灰船・壠・城文跡
-	元麻糸社千曲川遺跡	2002 - 04	古墳・水路網・土器・骨殖遺物、中世・大溝跡
-	元麻糸社中央城址跡	2016	古墳・住居跡・廃瓦・瓦礫・平安・独立柱建物跡・◇圓文土台（前・地盤）・埴輪・灰陶・須弥形土器・三星土器・埴輪・點斑石・土器

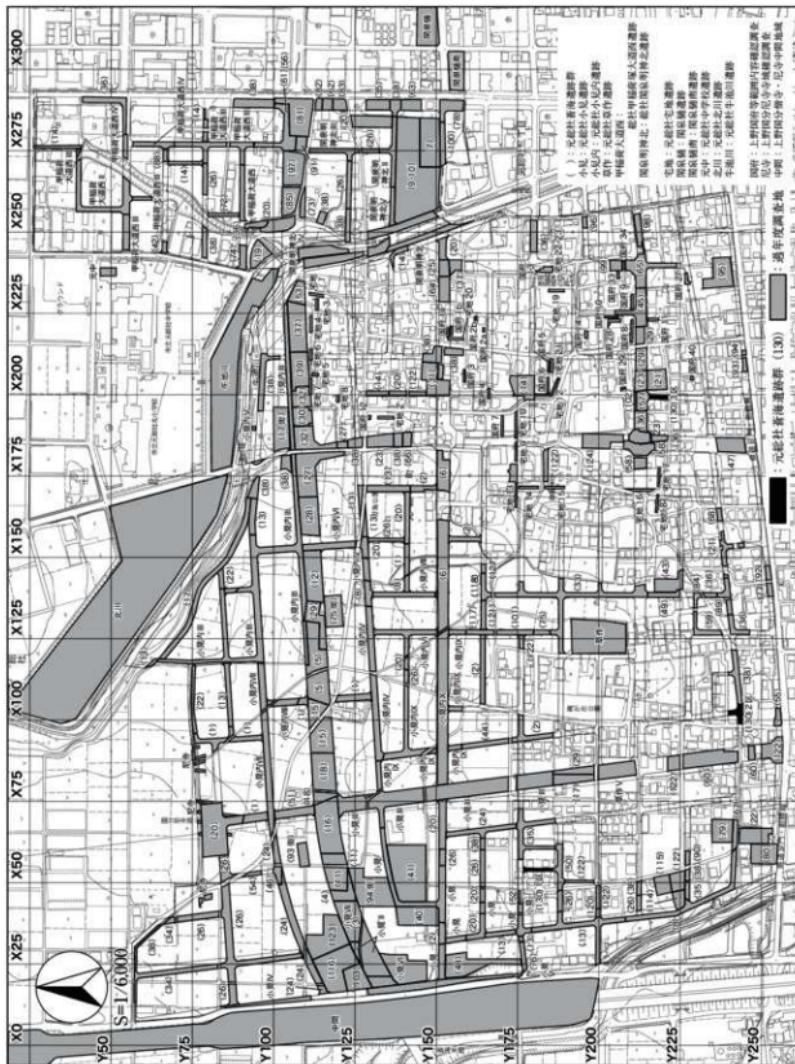


Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図

III 調査方針と経過

調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業地内であり、調査面積は3箇所合計505.20m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000, Y = - 72200.000を基点とする4mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。各調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系 测地成果2011）
1区 X 55, Y 180	X = 43280.000 m, Y = - 71980.000 m	X = 43634.850 m, Y = - 72271.295 m
2区 X 100, Y 240	X = 43040.000 m, Y = - 71800.000 m	X = 43394.916 m, Y = - 72091.762 m
3区 X 200, Y 220	X = 43120.000 m, Y = - 71400.000 m	X = 43474.851 m, Y = - 71691.302 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.15 m³バックホーまたは0.25 m³バックホー）にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo.遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。

遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行ない、断面図については一部オルソフォトに変換して編集を行なった。記録写真は35mmモノクロ・リバーサル、デジタルカメラの3種類を用いて撮影を実施した。

整理作業における出土遺物の計測は、従来の手実測からキーエンス社製3Dスキャナー（VL-300）による機械計測に切り替えた。誤差1mmの1/1,000という高精度な全点取得が可能で、従来の2次元図化以外の用途にも発展性が見込めるものである。

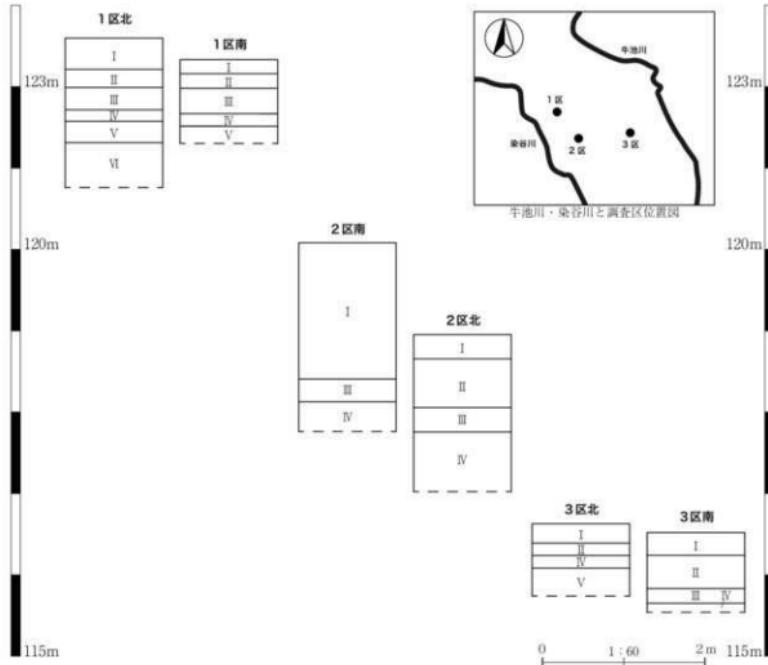
調査経過

元総社蒼海遺跡群（130）は調査区が3箇所に分かれている。それぞれの調査区が離れている事もあり同時に進行での調査は困難であるとの結論に至った。そのため順番に調査を進めることとなり、隣接地での開発が迫っている2区を最初の調査区とした。調査を開始するにあたり、仮設プレハブ・排土置場予定地の草刈り作業を9月10・11日に、調査区2区の周辺草刈りを12日に行った。9月18日、2区に重機を搬入し表土掘削を開始した。2区は宅地造成の為の盛土が施されており、表土層は1m以上堆積していた。また2区北側は南側と比較して一段低く、調査区壁面の崩落の可能性もあったため、安全面を考慮しての調査となつた。表土掘削と同時に作業員による遺構確認作業も開始した。9月19日から遺構掘削開始。9月25日、2区表土掘削が終了したため1区へ移動して表土掘削を行つた。9月26日、1区表土掘削終了。10月2日、2区調査区全景撮影。2区での調査終了。10月3日から1区の遺構掘削開始。10月8日、2区埋め戻し作業完了。10月5日・9日に1区全景撮影。1区での調査終了。10月20日、1区埋め戻し作業完了。10月12日、3区の表土掘削開始。同日から遺構確認・掘削前作業を行つた。同日、表土掘削終了。10月24日、3区全景撮影。3区での調査終了。10月26日、3区埋め戻し作業完了。現地での作業終了。

IV 基本層序

元総社蒼海遺跡群は相馬ヶ原扇状地に端を発する牛池川と染谷川との間の台地上に立地している。台地は相馬ヶ原扇状地から続く西から東への傾斜から元総社町周辺で北から南への傾斜へと移行する。本遺跡各調査区の基本層序を観察しても土層の堆積状況から同様の地形の変化が読みとれる事ができる。

土層は各調査区共通しており、1区でのみAs-C混入黒色土(C黒)が確認できる。確認面は1区ではⅢ層(As-C混入黒色土)、2区はⅣ層(総社砂層)、3区はⅣ層(総社砂層)である。



1区基本層序

- I 表土層
- II 暗褐色土 (10YR3/3) As-B 混土層。
- III 黒褐色土 (10YR2/2) As-C 混入黒色土。
- IV 暗褐色土 (10YR3/4) 総社砂層漸移層。
- V 黄褐色土 (10YR5/6) 総社砂層。
- V にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 総社砂層。

2区基本層序

- I 表土層
- II 暗褐色土 (10YR3/3) As-B 混土層。
- III 暗褐色土 (10YR3/4) 総社砂層漸移層。
- IV 黄褐色土 (10YR5/6) 総社砂層。

3区基本層序

- I 表土層
- II 暗褐色土 (10YR3/3) As-B 混土層。
- III 暗褐色土 (10YR3/4) 総社砂層漸移層。
- IV 黄褐色土 (10YR5/6) 総社砂層。
- V にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 総社砂層。

Fig. 5 基本層序

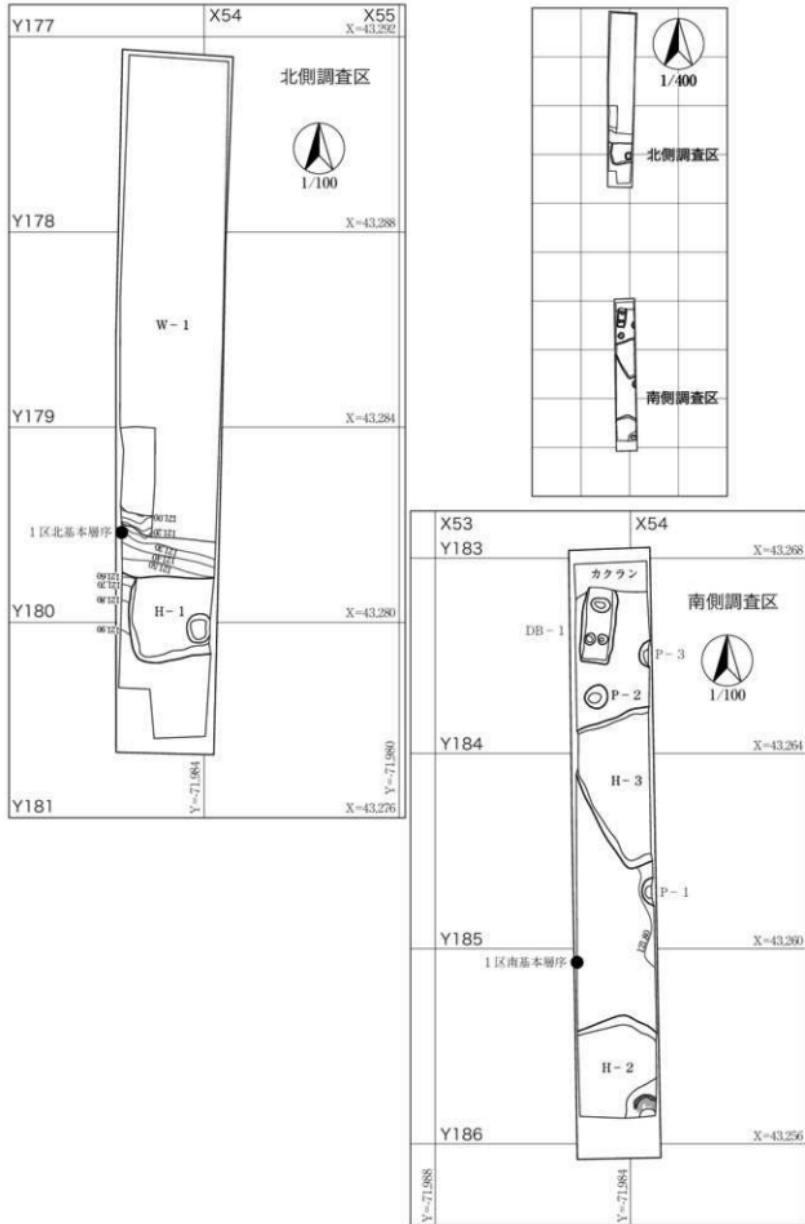


Fig. 6 1区全体図

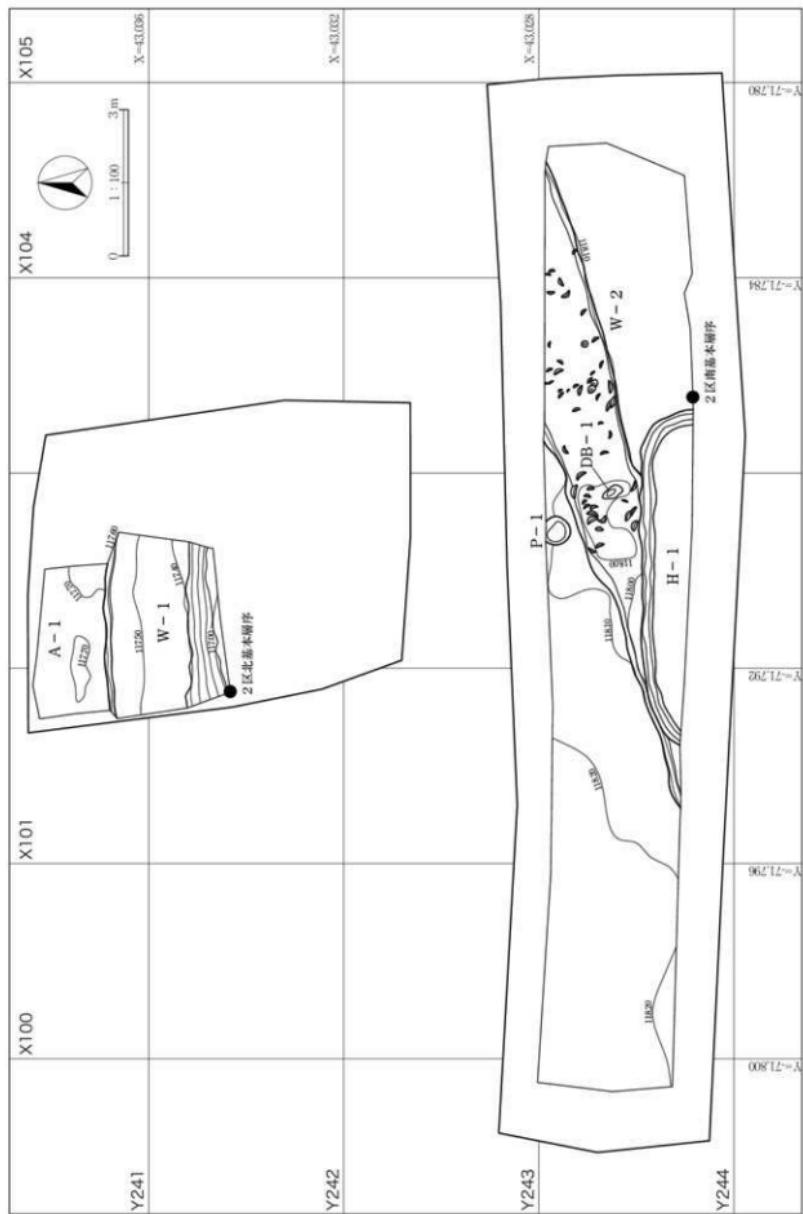


Fig. 7 2区全体图

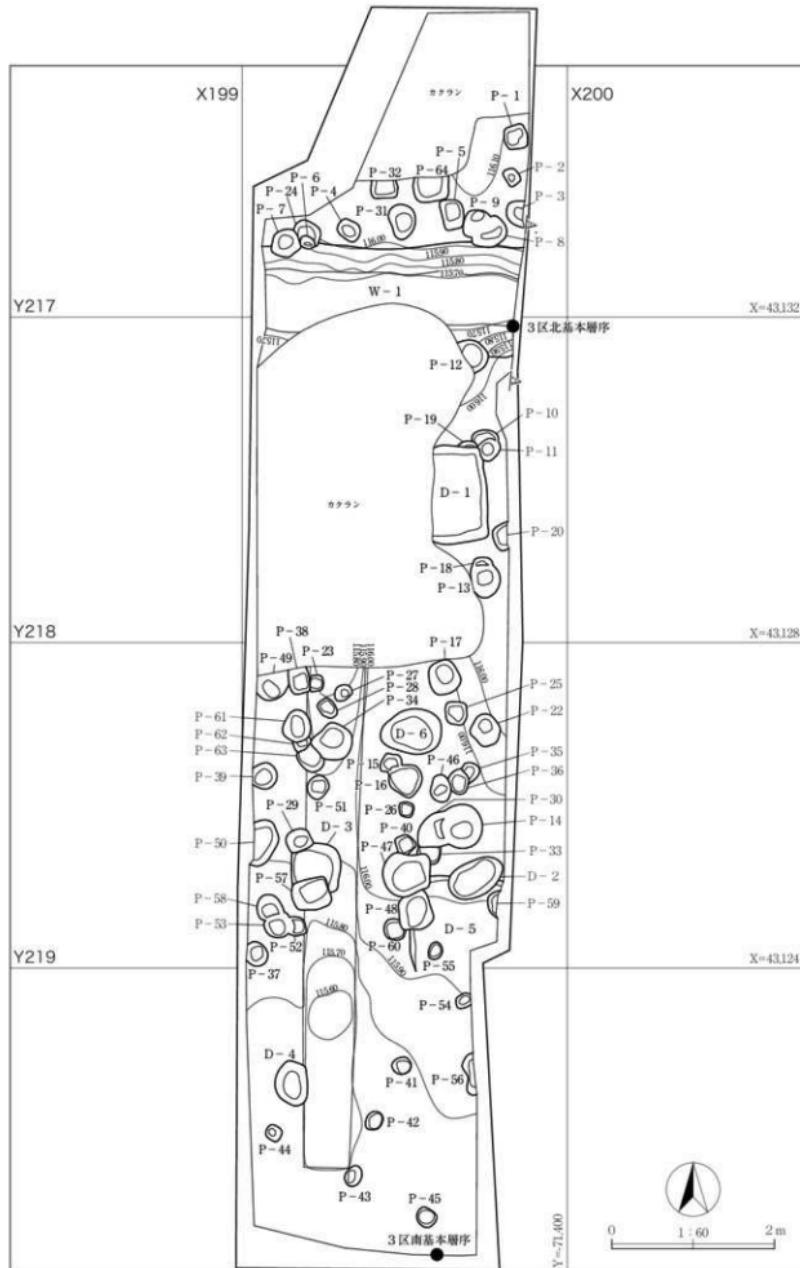


Fig. 8 3区全体図

V 遺構と遺物

1 1区

(1) 穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 9・10・14, PL. 2・7)

位置 X53・54、Y179・180 主軸方向 N-3°-E 規模 南北軸 (1.77) m、東西軸 (1.62) m。東側は調査区外、北側はW-1と重複しているため全体像は把握できず。壁高 0.30 m。重複 W-1と重複関係にあり、H-1が古い。床面 平坦。明確な硬化面は確認できず。カマド 確認できず。住居内施設 P1。掘り方 As-Cを微量含む砂質土で構築されている。基本土層毎層まで掘り込まれる。出土遺物 土師器坏(1)を図示。時期 出土遺物から7世紀前半と考えられる。

H-2号住居跡 (Fig. 9・10・14, PL. 2・7)

位置 X53・54、Y185 主軸方向 N-20°-W 規模 北東-南西軸 (1.08) m、北西-南東軸 (0.72) m。北西隅と住居跡の約1/2にあたる東側は調査区外。壁高 0.38 m。床面 平坦。明確な硬化面は確認できず。カマド 確認できず。住居内施設 調査区南東隅、住居中央部に地山を掘り残したマウンドを確認。中央部が窪み、マウンド頂部には灰褐色土の粘土が張られていた状態であった。被熱の痕跡が見られないことから炉跡の可能性は低いと考えられる。用途不明。掘り方 僅かではあるが掘り込みを確認。出土遺物 土師器坏(1)を図示。時期 出土遺物から7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig. 9・10・14, PL. 2・7)

位置 X53・54、Y183・184 主軸方向 N-26°-W 規模 南北軸 3.07 m、東西軸 (1.90) m。大部分が調査区外であるため全体像は把握できず。壁高 0.22 m。床面 平坦。明確な硬化面は確認できず。カマド 確認できず。住居内施設 無し。掘り方 無し。出土遺物 須恵器耳皿(1)、壺(2)、土師器壺を図示。時期 出土遺物から9世紀代と考えられる。

(2) 堀跡

W-1号堀 (Fig. 9・12, PL. 3)

位置 X53・54、Y177~180 走向方向 N-85°-W 規模 南北確認長 10.83 m、東西確認長 2.53 m。調査区北端部で底面の確認調査を行ったが、地表面から3 mの深度でも確認できなかった。深さ 3 m以上。覆土 暗褐色の砂質土が主体。重複 H-1と重複関係にあり、H-1が古い。出土遺物 土師器小片少量。時期 蒼海城の堀跡と考えられることから中世と想定される。備考 周辺遺跡での確認状況から元経社蒼海遺跡群(26)5・6区のW-2と元経社蒼海遺跡群(35)1区のW-1との交差点にあたると考えられる。

(3) 土塙墓

DB-1号土塙墓 (Fig. 9・13・15, PL. 3・7)

鉄釘が多数出土していることから木棺を伴う土塙墓と考えられる。位置 X53、Y183 主軸方向 N-5°-E 規模 長さ (1.56) m、上幅 0.70 m、下幅 0.53 m、確認面からの深さ 0.40 m。形状等 長方形。北側はカクランにより消失。底面には川原石5個を2列に並べた台石を確認。木棺を設置するための棺台の石と考えられる。一部の石材は木棺を平衡に設置するために打ち欠いている。人骨 確認されていない。出土遺物 須恵器坏(1)、土師質須恵器坏(2)と鉄釘(3~12)を図示。(2)は土塙北端から出土していることから遺体の頭部に置かれた土器と考えられる。(4~12)は錆化した木質が付着していることや出土位置等から木棺に打たれた釘と推測される。時期 出土遺物から10世紀代と考えられる。

(4) ピット (Fig. 9・13)

計測値については「Tab. 2 土坑・ピット計測表」を参照のこと。

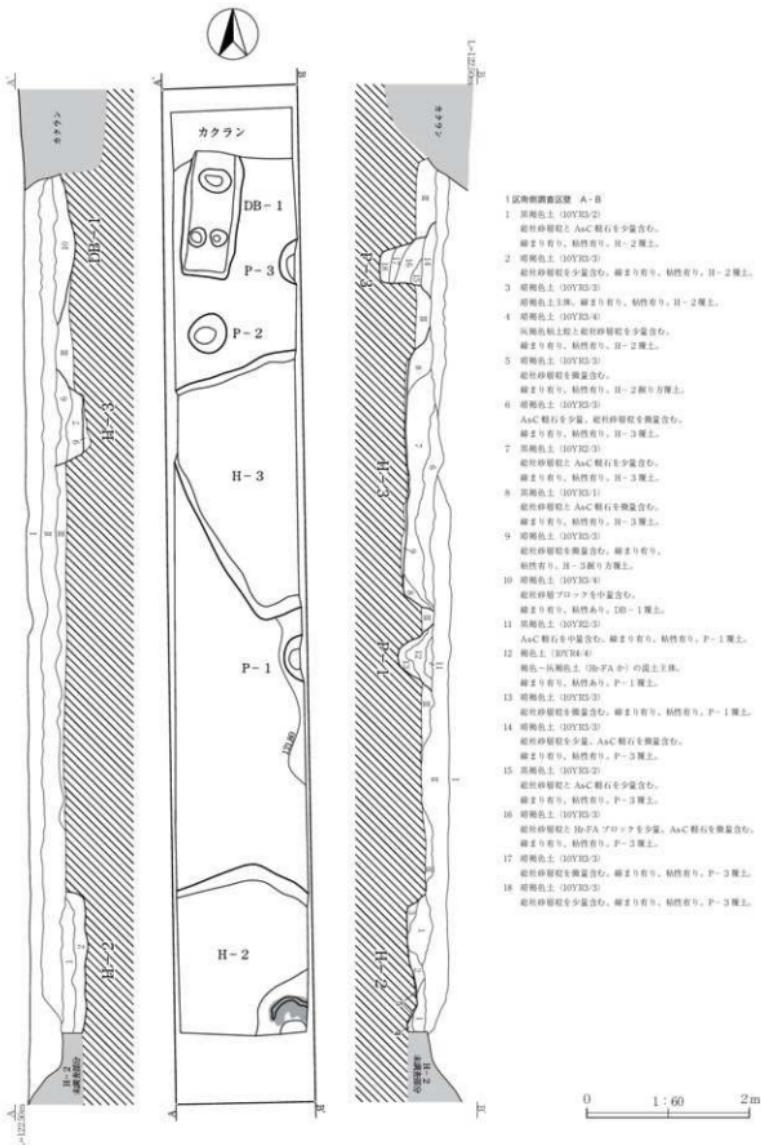
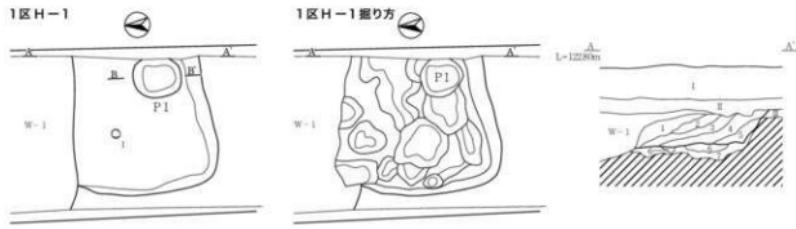
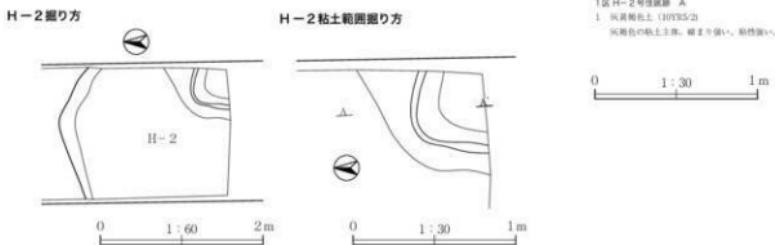
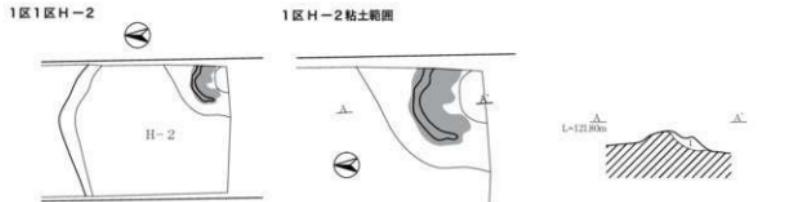
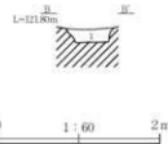


Fig. 9 1区南側調査区



- 1区 H-1 号住居跡 A
- 1 明褐色土 (10YR3/3) 細粒砂利層と AaC を微量含む。緻まりやや弱い。粘性有り。
 - 2 黒褐色土 (10YR3/2) 細粒砂利層 プロックを少量。AaC を微量含む。緻まり有り。粘性有り。
 - 3 黑褐色土 (10YR3/3) 売土層を少量。細粒砂利層 プロックを微量含む。緻まり有り。粘性有り。
 - 4 明褐色土 (10YR3/2) 細粒砂利層と 売土層を微量含む。緻まり有り。粘性有り。
 - 5 黑褐色土 (10YR3/2) 売土層 (質素土) 上体。粗粒の砂利を微量含む。緻まり有り。粘性有り。
 - 6 劣褐色土 (10YR4/4) 細粒砂利層を微量含む。緻まりやや強め。粘性有り。緻り有。
 - 7 黑褐色土 (10YR4/4) 細粒砂利層 プロック主体。緻まりやや強め。粘性やや強め。緻り有。
- 1区 H-1 号住居跡 P1 B
- 1 明褐色土 (10YR3/2) 細粒砂利層を少量含む。緻まり有り。粘性有り。



- 1区 H-2 号住居跡 A
- 1 深黄褐色土 (10YR3/2) 黄褐色の粘土上部。緻まり強い。粘性強め。

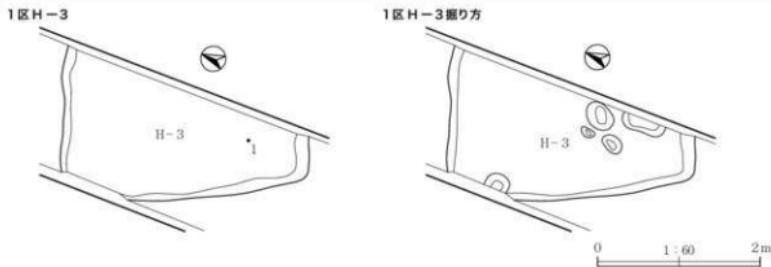
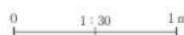


Fig.10 1区 H-1～3号住居跡

1区W-1

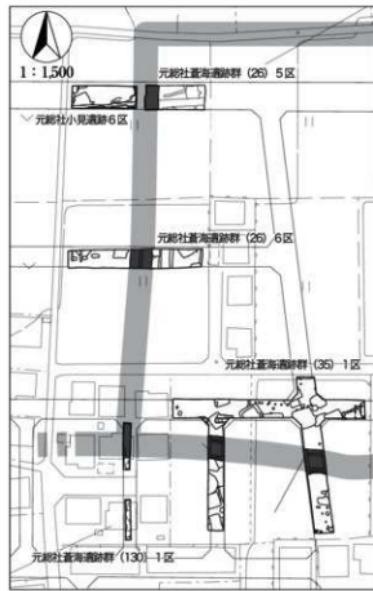
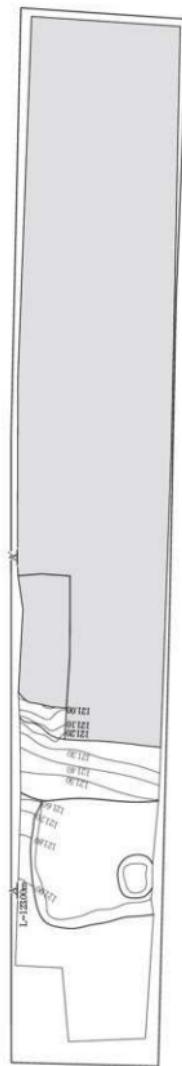
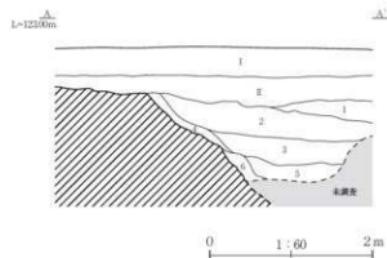


Fig.11 1区周辺の蒼海城に関連する堀 (1)



1区W-1号掘 A

- 1 黄褐色土 (JOYEG3-2) Aa-Bg 土。黄褐色細粒砂を夾層含む。縫まりやや弱い。粘性弱い。
- 2 黄褐色土 (JOYEG3-4) Aa-Bg 土。黄褐色細粒砂を中量含む。縫まりやや弱い。粘性弱い。
- 3 黄褐色土 (JOYEG3-5) サルガ青土。粗粒砂層ブロックを側面含む。縫土土質あり。粘性やや弱い。
- 4 黑褐色土 (JOYEG3-2) 黒褐色土 プロツクに粗粒砂層が少量混入。縫土土質あり。粘性やや弱い。
- 5 黄褐色土 (JOYEG3-3) サルガ青土。黄色細粒砂を少量。粗粒砂層を側面含む。縫土土質あり。粘性やや弱い。
- 6 黑褐色土 (JOYEG3-2) 黄色細粒砂。粗粒砂層を少量含む。縫土土質あり。粘性やや弱い。

Fig.12 1区W-1号掘

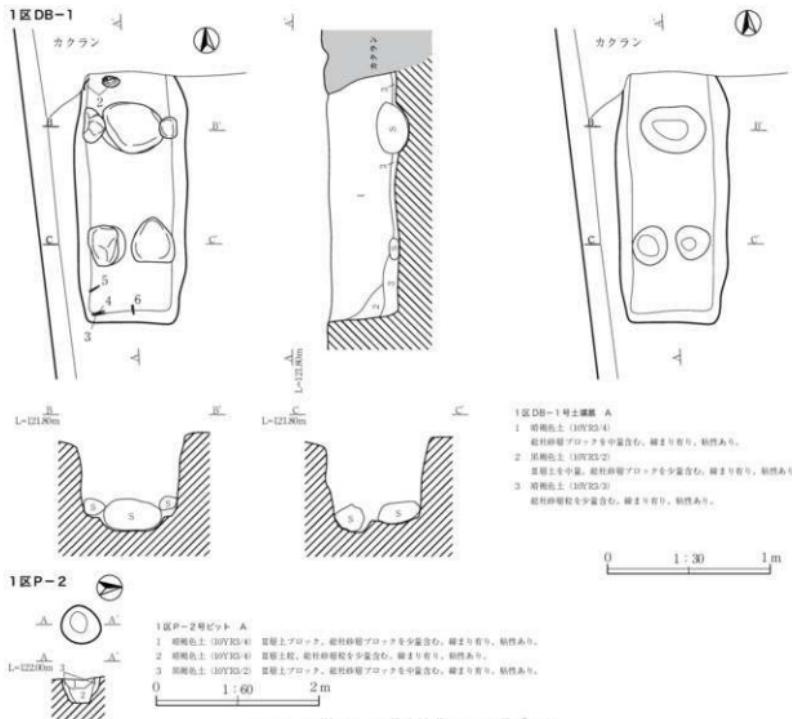


Fig.13 1区 DB-1号土壤窓、P-2号ピット

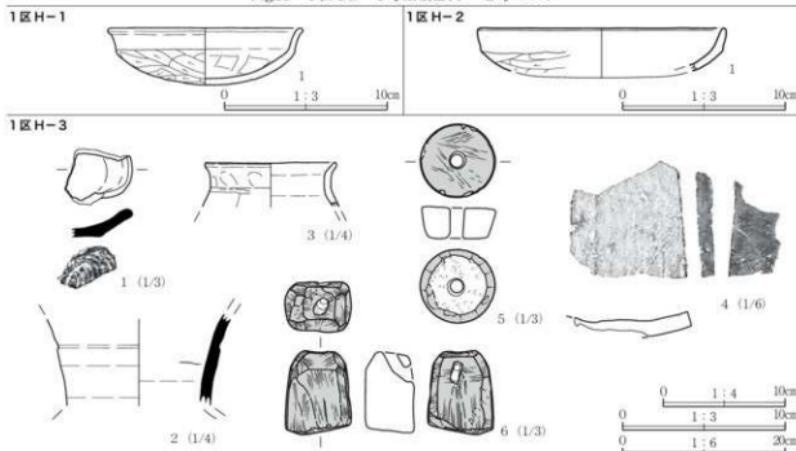
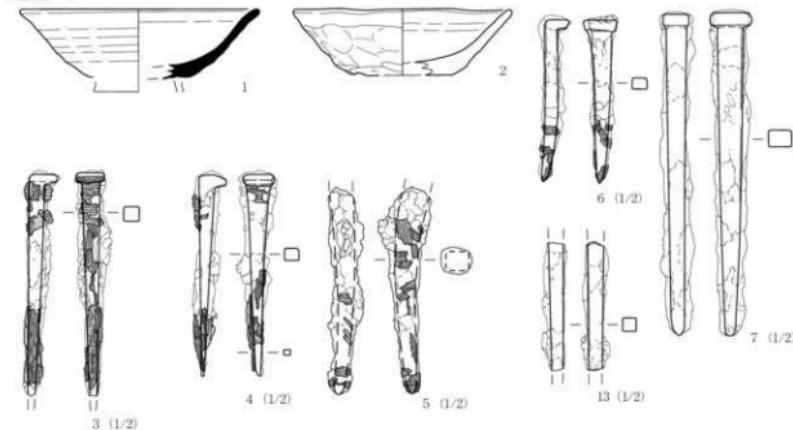


Fig.14 1区 H-1～3号住居跡出土遺物

1区 DB-1



--- 本片付着範囲 0 1:3 10cm

1区遺構外

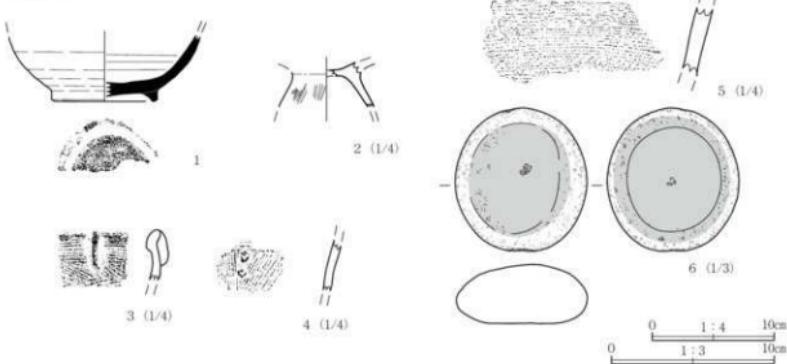


Fig.15 1区 DB-1号土壤墓・遺構外出土物

2 2区

(1) 穴住居跡

H-1号住居 (Fig.16・18, PL. 4)

位置 X101～103, Y243 主軸方向 N-4°-W 規模 南北軸 (1.12) m、東西軸 6.87 m。南方は調査区外。壁高 0.43 m。重複 W-2 と重複関係にあり、確認状況から H-1 が古いと考えられる。床面 平坦。全体的に硬化。掘り方断面で硬化層が確認できる。カマド 確認できず。住居内施設 壁構を全周開で確認。床面からの深さ 0.12 m。掘り方 主に壁際を掘り込んでいる。出土遺物 須恵器蓋 (1) を図示。その他には土師器の小片が出土。時期 出土遺物や W-2 との重複関係から 8世紀以前と考えられる。

(2) 溝・堀

W-1号堀 (Fig.19, PL. 4)

位置 X101・102, Y240・241 走向方向 N-89°-E 規模 確認長 3.82 m、幅 (260) m。地表面からの深さ 1.95 m。形状等 堀全体の確認には至っていないため断面形状は不明。北側に幅約 1.5 m の平坦な面が広がる。重複 A-1 と重複関係にあり、確認状況から A-1 が新しい。出土遺物 無し。時期 蒼海域の堀跡と考えられることから中世と想定される。

W-2号溝 (Fig.16・18, PL. 4)

位置 X101～104, Y242・243 走向方向 N-70°-E 規模 確認長 13.40 m、最大幅 1.98 m。深さ 0.09～0.27 m。形状等 底面はほぼ平坦で、各所に鉤・鉤等による掘削痕が確認できる。断面形状は浅い逆台形を呈する。重複 H-1・DB-1 と重複関係にあり、(古) H-1 → 本遺構 → DB-1 (新) である。出土遺物 須恵器蓋 (1) を図示。その他には土師器小片が出土。時期 DB-1 との重複関係から 9世紀以前に廃絶されたと考えられる。備考 元總社蒼海遺跡群 (60) C 区 W-1 の延伸部である (Fig.31)。

(3) 土壙墓

DB-1号土壙墓 (Fig.16・17・20, PL. 4)

位置 X102, Y243 主軸方向 N-21°-W 規模 土器群の範囲長 0.62 m、幅 0.22 m。W-2 底面から DB-1 底面までの深さ 0.16 m。形状等 上面の形状は不明。底面は不整な楕円形状の掘り込みがある。重複 W-2 と重複関係。確認状況から W-2 が古い。出土遺物 土師器壺が 3点出土した。(1) と (2) は合わせ口状に置かれ、底部を欠いた (2) の胴下半に (3) の口縁部が接続している状態で確認された (Fig.17)。出土状況から合口土器棺墓と考えられる。人骨 確認されず。時期 棺に使用されている土器の年代から 9世紀代と想定される。備考 W-2 廃絶後に掘られた土壙墓と考えられる。

(4) 道路跡

A-1号道路跡 (Fig.19, PL. 4)

位置 X101・102, Y240 走向方向 N-89°-E 規模 確認長 3.01 m、確認幅 1.71 m。道路跡の南端を確認。北端は調査区外。走向方向から W-1 に沿って延びると考えられる。重複 W-1 と重複関係。W-1 が古い。路面 全体的に硬化。断面観察から少なくとも硬化面 (路面) が 6面確認できる。(Fig.19) は最下層 (最も古い時期) の硬化面を図示。付属施設等 南側に W-2 の覆土を掘り込んでいる側溝と考えられる溝状遺構が断面で確認できる。堆積状況から当初設置されていた側溝は土砂の堆積により初段階の路面とともに埋没し、その後は側溝の持たない道路として機能していたと考えられる。掘り方 中央部が一段低く掘り込まれる。出土遺物 近世～近代の陶磁器少片少量。時期 出土遺物から近世から近代にかけて使用されていたと想定される。

(5) ピット

計測値については「Tab. 2 土坑・ピット計測表」を参照のこと。

2区H-1・W-1・DB-1・P-1



Fig.16 2区H-1号住居跡、W-2号溝、DB-1号土壤墓、P-1号ピット(1)

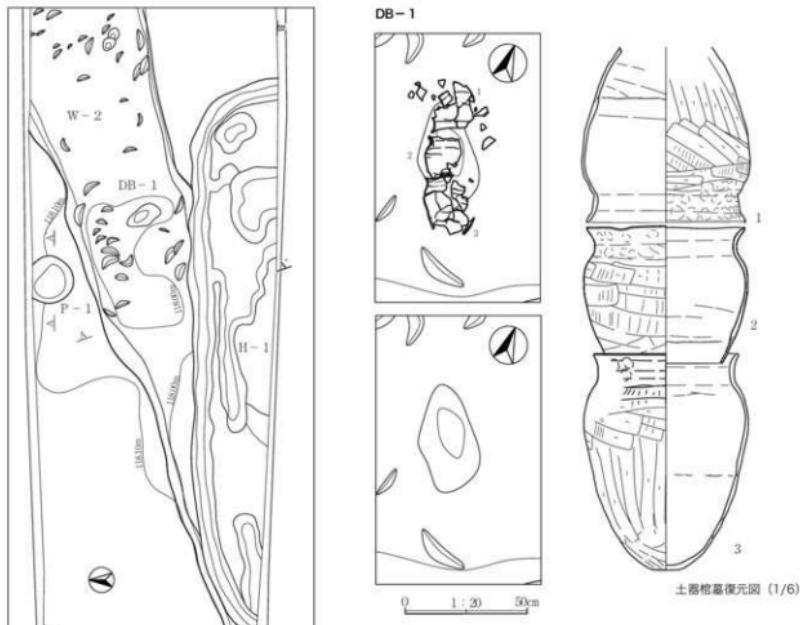


Fig.17 2区DB-1号土壤墓

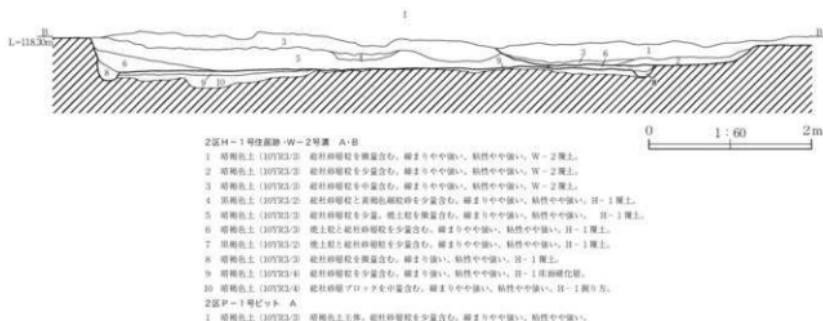
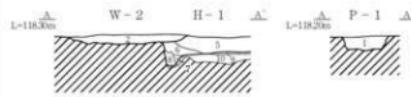
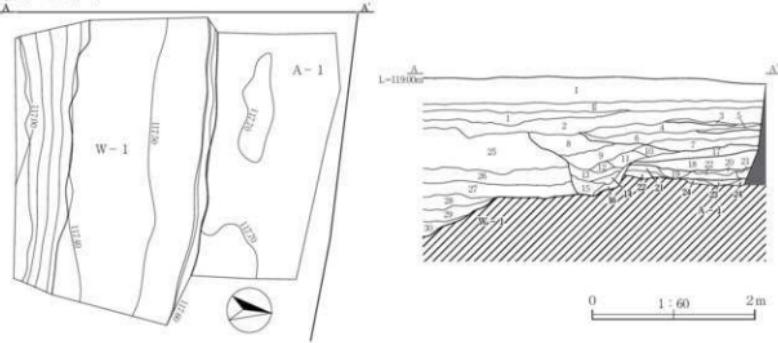


Fig.18 2区H-1号住居跡、W-2号溝、DB-1号土壤墓、P-1号ピット(2)

2区W-1号堀・A-1号道路 A

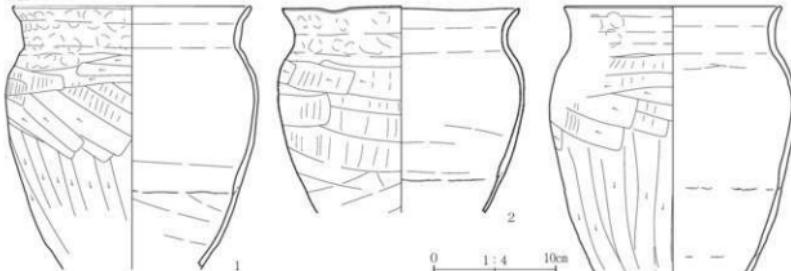


2区W-1号堀・A-1号道路 A

- 1 希薄土色土 (30Y3-3) A_{ab} 混土主層。As-C粗粒と細粒砂を微量含む。緻密り強い。粘性有り。
- 2 密薄土色土 (30Y3-2) A_{ab} 混土を中量。As-C粗粒と細粒砂を微量含む。緻密り弱い。粘性有り。
- 3 黑褐色土 (30Y3-2) 硫化物鉱を微量含む。緻密り弱い。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 4 黑褐色土 (30Y3-2) 硫化物鉱を微量含む。緻密り弱い。A-1覆土。
- 5 黑褐色土 (30Y3-2) 硫化物鉱と硫酸鉄主層。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 6 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利を微量含む。緻密り弱い。粘性有り。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 7 喜褐色土 (30Y3-2) 硫酸鉄を中量含む。緻密り弱い。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 8 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利を微量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 9 喜褐色土 (30Y3-2) 硫化物鉱を微量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 10 喜褐色土 (30Y3-2) 硫化物鉱を微量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 11 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利を微量。純社砂鉱石を微量含む。緻密り有り。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 12 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利。緻密りやや弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 13 喜褐色土 (30Y3-4) 硫利砂鉱石。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 14 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利を微量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 15 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利砂鉱石。緻密り有り。粘性有り。A-1覆土。
- 16 喜褐色土 (30Y3-2) 硫利砂鉱石を少量含む。緻密り有り。粘性有り。A-1覆土。
- 17 喜褐色土 (30Y3-3) 硫化物鉱と鈣粉を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 18 喜褐色土 (30Y3-3) 硫化物鉱と鈣粉を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。堅下が硬分化。A-1覆土。
- 19 喜褐色土 (30Y3-4) 硫利砂鉱を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 20 喜褐色土 (30Y3-4) 硫利を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 21 喜褐色土 (30Y3-4) 硫化物鉱と鈣粉を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 22 喜褐色土 (30Y3-4) 硫化物鉱を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 23 喜褐色土 (30Y3-4) 硫化物鉱を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 24 喜褐色土 (30Y3-4) 硫化物鉱を少量含む。緻密り弱い。粘性有り。A-1覆土。
- 25 喜褐色土 (30Y3-5) Asと混土を少量。As-C粗粒と地土層を少量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 26 喜褐色土 (30Y3-4) Asと混土を少量。As-C粗粒と地土層を少量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 27 喜褐色土 (30Y3-5) Asと混土を少量。As-C粗粒と地土層を少量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 28 黒褐色土 (30Y3-4) 硫化物鉱を中量。地土層を少量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 29 喜褐色土 (30Y3-3) 硫化物鉱と地土層を微量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。A-1覆土。
- 30 喜褐色土 (30Y3-3) 硫化物鉱を少量含む。緻密りやや弱い。粘性りやや弱い。W-1覆土。

Fig.19 2区W-1号堀・A-1号道路跡

2区DB-1



2区遺構外



Fig.20 2区DB-1号土壙墓、遺構外出土物

3 3区

(1) 堀

W-1号堀 (Fig.21・26、PL. 5・6・8)

位置 X199、Y216・217 走向方向 N-89°-W 規模 確認長3.22m、上幅1.39m、下幅0.60m。深さ0.44m。 形状等 底面は平坦。断面形状は逆台形。 出土遺物 染付碗(1)、かわらけ(2・3)、擂鉢(4・6)、銅製笠瓶(7)、石臼(8・9)を図示。詳細は「VI 発掘調査の成果と課題」に記載。 時期 莽海城の時期に構築され、出土遺物から17世紀初頭には埋没したと考えられる。 備考 小～中型の罐や陶器片が中～下層から出土している等から、人的に埋められた可能性が高い。

(2) 土坑・ピット

土坑 (Fig.22・27、PL. 5・6・8)

土坑を6基検出。 形状等 計測値については「Tab. 2 土坑・ピット計測表」を参照のこと。 出土遺物 D-3から青磁碗(1)、染付碗(2)、かわらけ(3)が出土。D-6からは土師質小皿(1)と羽口(2)が出土している。羽口自体には炉体接続の痕跡が見られないことから製鉄炉に付属するものではなく、鍛冶炉で使用された羽口と考えられる。土坑内からは鍛造剥片等の鍛冶に関連するような遺物や炉跡は確認されていない。周辺で鍛冶が行われていたと考えられる。

ピット (Fig.23～25・27、PL. 5・6・8・9)

ピットを63基検出。重複関係のピットもあることから複数時期に渡って立替えが行われたと推測される。

形状等 計測値については「Tab. 2 土坑・ピット計測表」を参照のこと。 出土遺物 かわらけ、銭を図示。

時期 出土遺物から莽海城二の丸における建物の柱跡であると考えられる。

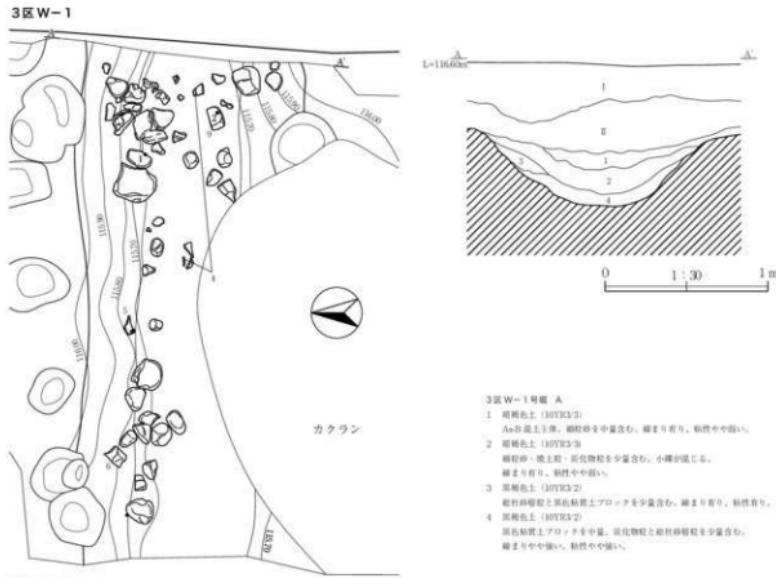


Fig.21 3区 W-1号堀

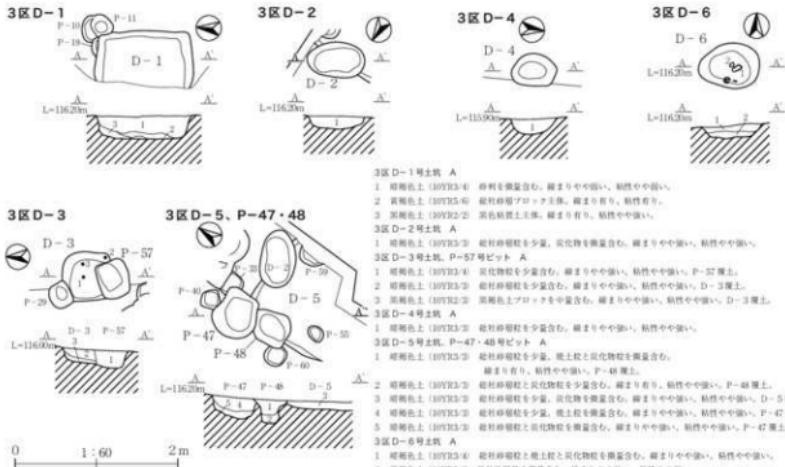


Fig.22 3区土坑

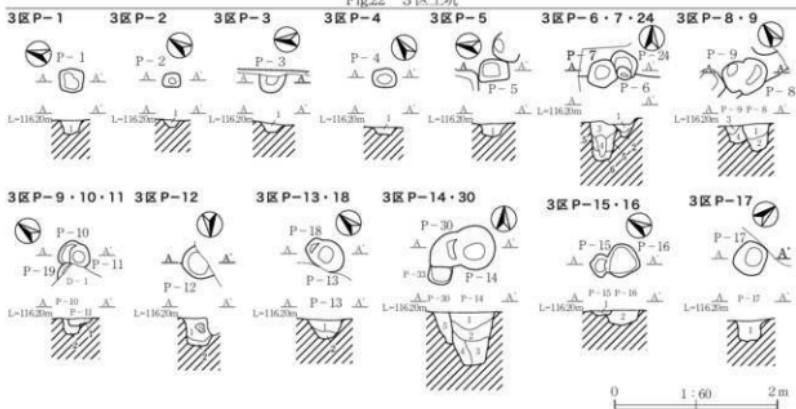


Fig.23 3区ピット(1)

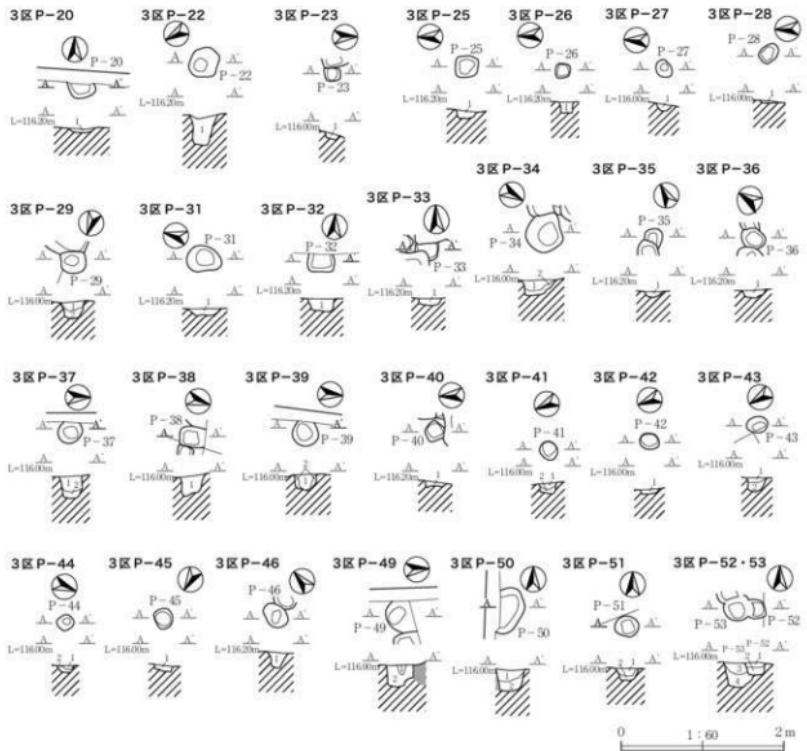


Fig.24 3区ビット(2)



Fig25 3区ピット (3)

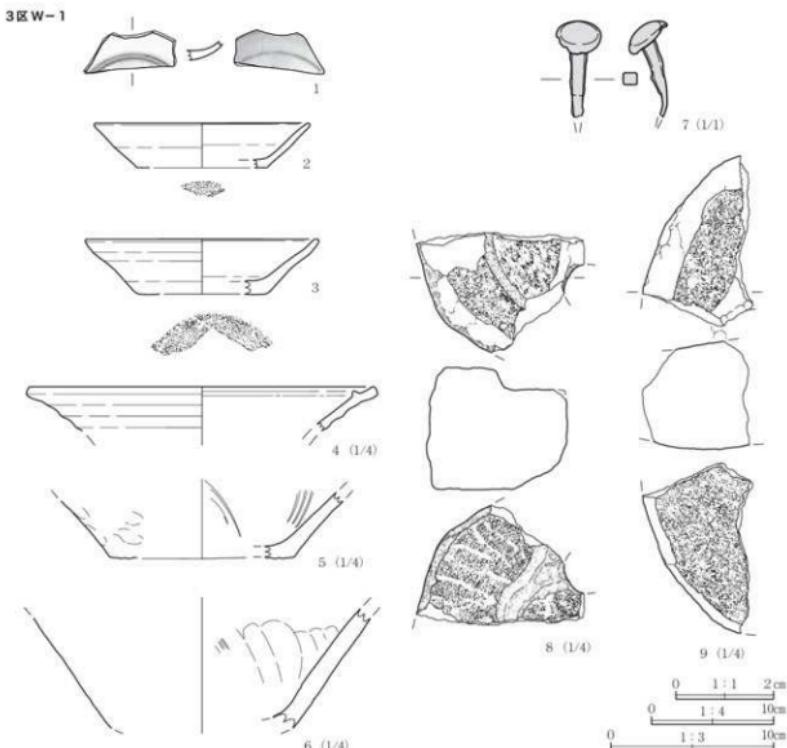


Fig26 3区 W-1号掘出土遺物

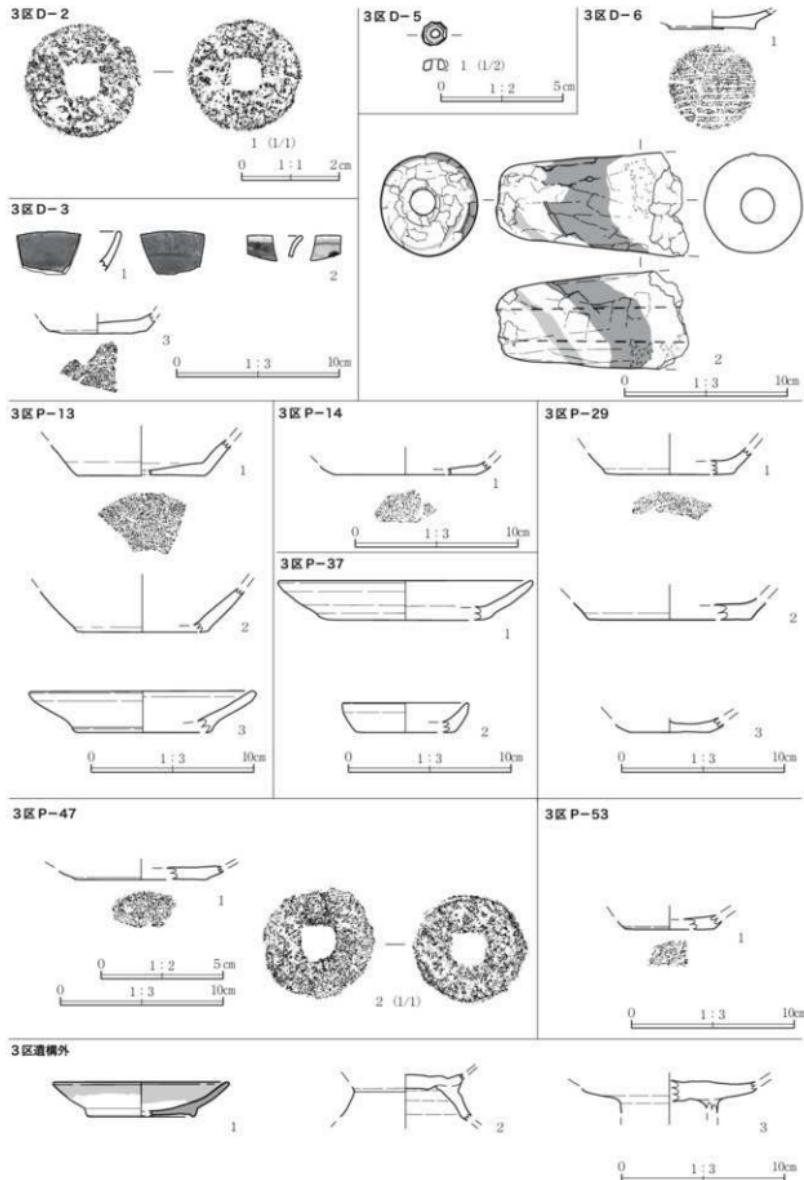


Fig.27 3区土坑・ビット・造模外出土物

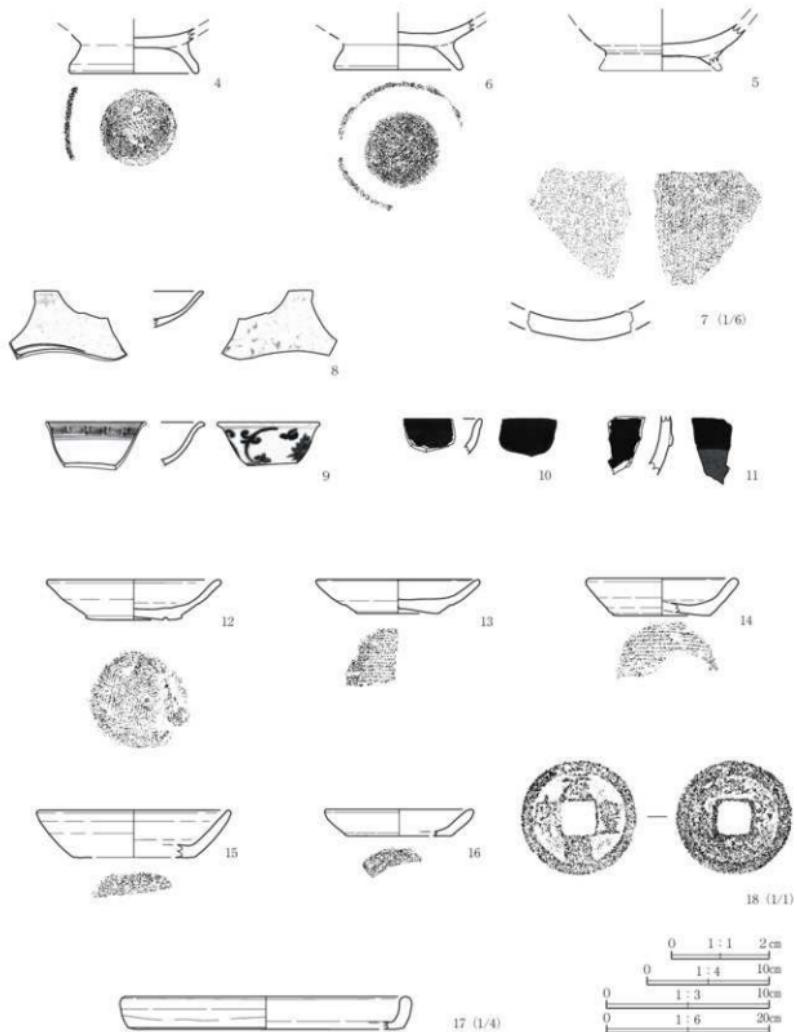


Fig.28 3区遺構外出土遺物

Tab. 2 土坑・ピット計測表

1区

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	重複(古→新)	出土遺物	備考
P-1	X54, Y184	0.58	(0.24)	0.30	円形			
P-2	X53, Y183	0.48	0.47	0.33	円形		鏡文土器	
P-3	X54, Y183	0.56	(0.22)	0.44	円形			

2区

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	重複(古→新)	出土遺物	備考
P-1	X102, Y243	0.58	(0.50)	0.18	円形			

3区

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	重複(古→新)	出土遺物	備考
D-1	X199, Y217	1.22	(0.70)	0.30	長方形	P-10→19→P-11→D-1	近世陶磁器、ガラス片	近代の土坑
D-2	X199, Y218	0.71	0.44	0.16	楕円形	D-5→D-2	白磁、かわらけ、銅、銅鏡	15世紀後半
D-3	X199, Y218	0.61	(0.60)	0.23	隅丸方形	D-3→P-29, 37	青磁、白磁、染付、かわらけ	15世紀中頃
D-4	X199, Y219	0.56	0.40	0.18	楕円形			
D-5	X199, Y218	0.75	0.57	0.16	方形	D-5→D-2→P-47, 48, 55, 59	かわらけ	
D-6	X199, Y218	(1.15)	(1.07)	0.11	楕円形		羽目、土師質小皿	11世紀代か
P-1	X199, Y216	0.29	0.29	0.17	方形			
P-2	X199, Y216	0.22	0.17	0.10	方形			
P-3	X199, Y216	(0.20)	0.22	0.14	楕円形			
P-4	X199, Y216	0.29	0.23	0.09	方形		かわらけ、銅	
P-5	X199, Y216	0.36	0.28	0.16	方形			
P-6	X199, Y216	0.18	0.16	0.23	楕円	P-24→P-7→P-6→W-1		
P-7	X199, Y216	0.39	0.33	0.48	不整形	P-24→P-7→P-6→W-1		
P-8	X199, Y216	0.45	0.35	0.34	不整形	P-9→P-8		
P-9	X199, Y216	0.38	(0.27)	0.22	不整形	P-9→P-8		
P-10	X199, Y217	(0.33)	(0.28)	0.07	楕円形	P-10→19→P-11→D-1		
P-11	X199, Y217	(0.29)	0.24	0.22	方形	P-10→19→P-11→D-1		
P-12	X199, Y217	0.42	0.27	0.35	楕円形	P-12→W-1	陶器類、土器、かわらけ	
P-13	X199, Y217	(0.37)	0.35	0.24	楕円形	P-18→P-13	かわらけ	
P-14	X199, Y218	0.57	0.54	0.65	円形	P-33→P-30→P-14	かわらけ	
P-15	X199, Y218	0.25	0.23	0.06	方形	P-15→P-16		
P-16	X199, Y218	0.41	0.39	0.19	不整形	P-15→P-16	青磁、陶器類、かわらけ	
P-17	X199, Y218	0.41	0.38	0.26	方形			
P-18	X199, Y217	(0.25)	(0.12)	0.15	楕円形か	P-18→P-13		
P-19	X199, Y217	(0.25)	(0.08)	(0.23)	楕円形か	P-10→19→P-11→D-1		
P-20	X199, Y217	0.31	(0.23)	0.06	方形			
P-22	X199, Y218	0.39	0.34	0.37	隅丸方形		かわらけ	
P-23	X199, Y218	0.20	0.17	0.11	方形	P-38→P-23	かわらけ	
P-24	X199, Y216	0.34	(0.28)	0.11	方形	P-24→P-7→P-6→W-1		
P-25	X199, Y218	0.28	0.27	0.12	方形			

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	重複(古→新)	出土遺物	備考
P - 26	X199, Y218	0.19	0.18	0.15	方形			
P - 27	X199, Y218	0.22	0.20	0.10	隅丸方形			
P - 28	X199, Y218	0.25	0.19	0.04	方形		かわらけ	
P - 29	X199, Y218	0.31	0.27	0.23	方形	D - 3 → P - 29	陶器類、かわらけ	
P - 30	X199, Y218	0.41	(0.35)	0.39	梢円形	P - 33 → P - 30 → P - 14	かわらけ	
P - 31	X199, Y216	0.43	0.32	0.09	梢円形			
P - 32	X199, Y216	0.33	0.22	0.16	方形		火葬、かわらけ、瓦製品	
P - 33	X199, Y218	0.28	(0.23)	0.09	方形	P - 33 → P - 30 - 47 → P - 14		
P - 34	X199, Y218	0.48	0.47	0.19	方形	P - 63 → P - 62 → P - 61 → P - 34	かわらけ	
P - 35	X199, Y218	0.30	0.22	0.08	梢円形	P - 46 → P - 36 → P - 35		
P - 36	X199, Y218	0.30	0.26	0.09	梢円形	P - 46 → P - 36 → P - 35	かわらけ	
P - 37	X199, Y218	0.30	(0.27)	0.27	隅丸方形		かわらけ	
P - 38	X199, Y218	(0.32)	0.25	0.27	方形	P - 38 → P - 49		
P - 39	X199, Y218	0.32	0.32	0.20	隅丸方形		かわらけ	
P - 40	X199, Y218	0.24	0.22	0.09	方形	P - 40 → P - 47		
P - 41	X199, Y219	0.23	0.21	0.14	隅丸方形		かわらけ	
P - 42	X199, Y219	0.24	0.20	0.07	梢円形			
P - 43	X199, Y219	0.26	0.20	0.18	梢円形		かわらけ	
P - 44	X199, Y219	0.20	0.18	0.08	方形		かわらけ	
P - 45	X199, Y219	0.25	0.22	0.09	方形		かわらけ	
P - 46	X199, Y218	0.34	0.25	0.20	梢円形	P - 46 → P - 36 → P - 35		
P - 47	X199, Y218	0.58	0.54	0.29	隅丸方形	D - 5, P - 33 - 40 - 46 → P - 47 → P - 48	青磁、白磁、かわらけ、調理	
P - 48	X199, Y218	(0.52)	0.40	0.29	隅丸方形	D - 5, P - 47 → P - 48 → P - 60	粗鉢、かわらけ	
P - 49	X199, Y218	(0.39)	(0.33)	0.27	梢円形か	P - 38 → P - 49		
P - 50	X199, Y218	0.57	(0.35)	0.28	梢円形		鉢、かわらけ	
P - 51	X199, Y218	0.30	0.26	0.16	隅丸方形		かわらけ	
P - 52	X199, Y218	(0.26)	0.23	0.16	方形	P - 58 → P - 53 → P - 52	高台廻	
P - 53	X199, Y218	(0.32)	(0.29)	0.31	隅丸方形	P - 58 → P - 53 → P - 52	かわらけ	
P - 54	X199, Y219	(0.21)	0.16	0.08	隅丸方形			
P - 55	X199, Y218	0.21	0.18	0.07	梢円形	D - 5 → P - 55		
P - 56	X199, Y219	0.51	(0.14)	0.13	不整形		かわらけ	
P - 57	X199, Y218	0.46	0.39	0.22	方形	D - 3 → P - 57		
P - 58	X199, Y218	0.31	(0.30)	0.18	梢円形	P - 58 → P - 53 → P - 52	かわらけ	
P - 59	X199, Y218	0.34	(0.15)	0.19	隅丸方形か	D - 5 → P - 59		
P - 60	X199, Y218	0.27	0.25	0.05	方形	D - 5 → P - 48 → P - 60	かわらけ	
P - 61	X199, Y218	0.40	0.36	0.21	梢円形	P - 63 → P - 62 → P - 61 → P - 34		
P - 62	X199, Y218	0.23	(0.15)	0.12	方形	P - 63 → P - 62 → P - 61 → P - 34		
P - 63	X199, Y218	(0.36)	(0.31)	0.11	梢円形	P - 63 → P - 62 → P - 61 → P - 34		
P - 64	X199, Y216	0.43	(0.32)	0.18	方形			

* P - 21 は欠番

Tab. 3 出土遺物観察表

1区

1区 H - 1

No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	土器類 环	12.0	-	3.5	白・黒色粒	橙色	外周：口縁部横ナデ、以下ハラケズリ。 内面：横ナデのち舟ナデ。	1/3欠損。

1区 H - 2

No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土器類 环	[15.0]	-	[3.1]	白・黒色粒	にぶい橙色	外周：口縁部横ナデ、以下ハラケズリ。 内面：ナデ。	口縁部1/6残存。

1区 H - 3

No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	領忠器 耳皿	-	-	1.7	白色粒	灰白色	外周：横ナデ 内面：横ナデ 底部回転系切り。	1/4残存。
2	覆土	領忠器 壁盤	-	-	7.4	白・黒色粒	灰白色	内外面：回転ロクロナデ。	腹部1/4残存。
3	覆土	土器類 环	[11.0]	-	3.5	長石。黑色粒	青褐色 内面：にぶい橙色	外周：口縁部横ナデ、底部指オサエ、以下横位ハラケズリ。 内面：横ナデ。	口縁部破片。
No	出土位置	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
4	覆土	瓦 平瓦	-	-	[14.0]	白・黒色粒	灰白色	円面有目。凸面ナデ。縁部ハラケズリ。	1/8残存。
No	出土位置	種別	直径 (cm)	円孔径 (cm)	厚さ (cm)	石材	重さ (g)	特徴	残存状況、備考
5	覆土	石製品 純鍛車	4.6	1.0	1.9	凝灰岩	519	上面及び側面は滑らかで、側面には僅かな棱を有する。 やや平岡な研磨面が認められる。	完存。
No	出土位置	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	重さ (g)	特徴	残存状況、備考
6	覆土	石製品 破石	5.1	4.1	3.1	凝灰岩	305	全面研磨。各面には研磨方向の異なる研磨面が複数認められ、上面から裏面下部には斜めに孔が穿たれている。孔は完存。 内部で屈曲する。	完存。

1区 DB - 1

No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	領忠器 高台瓶	[14.7]	[5.3]	(4.3)	褐・黒色粒	灰白色	外周：回転ロクロナデ、底部回転系切り後高台貼付け。 内面：回転ロクロナデ。	1/4残存。
2	底部付近	土器類 环	13.4	6.6	4.1	白・黒色粒	にぶい褐色	外周：体部指ナゼ豊形後、L3縁部横ナデ、体部下半から底部にかけてハラケズリ。 内面：ナデ。	
No	出土位置	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	重さ (g)	特徴	残存状況、備考
3	壁面付近	鉄製品 刃	(9.1)	1.2	1.2	鉄	(15.5)	鍛及び木片付着。	先端部欠損。
4	壁面付近	鉄製品 刃	8.2	1.3	1.1	鉄	133	鍛及び木片付着。	ほぼ完存。
5	壁面付近	鉄製品 刃	(8.4)	1.0	0.9	鉄	(19.1)	鍛及び木片付着。	頭部欠損。
6	壁面付近	鉄製品 刃	6.6	1.3	1.0	鉄	80	鍛及び木片付着。	完存。
7	覆土	鉄製品 刃	13.2	1.8	1.1	鉄	966	鍛付着。	完存。
8	覆土	鉄製品 刃	(9.0)	1.1	0.8	鉄	(18.5)	鍛及び木片付着。	先端部欠損。
9	覆土	鉄製品 刃	(9.3)	1.2	1.1	鉄	(14.0)	鍛及び木片付着。	先端部欠損。
10	覆土	鉄製品 刃	(7.7)	0.8	1.1	鉄	(15.8)	鍛及び木片付着。	先端部欠損。
11	覆土	鉄製品 刃	(6.9)	1.1	1.1	鉄	(14.8)	鍛及び木片付着。屈曲変形。	先端部欠損。
12	覆土	鉄製品 刃	7.5	1.1	1.2	鉄	15.5	鍛付着。	完存。
13	覆土	鉄製品 刃	(5.3)	(0.7)	(0.6)	鉄	(7.3)	鍛付着。	頭部・先端部欠損。

1区 遺構外

No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	調査区	領忠器 高台瓶	-	(6.5)	(3.9)	長石。白色粒	にぶい灰白色	外周：回転ロクロナデ、底部回転系切り後高台貼付け。 内面：回転ロクロナデ。	体部下半～底部1/4。

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	形態、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
2	調査区 S字型柱台付要	土師器	-	-	(3.6)	黒色粒	黄褐色	外面：継縫のハケ目。 内面：ナデ。	削下半～脚部片。
3	調査区 調文土器 脊	土師器	-	-	(4.1)	黒色・灰色粒	に赤い橙色	横縫の集合式継縫と矢羽羽の文様で構成されている。U3脚部	U3脚部片。諸窓 c期。
4	調査区 調文土器 脊	土師器	-	-	(4.1)	黒色粒	に赤い黄褐色	斜縫の集合式継縫にボタン形の粘土錐を貼り付ける。	脚部片。諸窓 c期。
5	調査区 調文土器 脊	土師器	-	-	(5.4)	白地・灰色粒	暗褐色	調文施文後に横積合式継縫で区画する。	脚部片。諸窓 b式期。

2区

2区 DB - 1

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	石材	重さ(g)	特徴	残存状況、備考
1	底面	土師器 壺	[196]	-	(21.5)	白色・黒色粒	に赤い橙色	外面：U3脚部・茎部継縫ナメと留イキニ。脚上半斜傾ヘラケズリ。 脚下半吸付ヘラケズリ。 内面：ナデ。脚下半斜傾ナメ。	U3脚部・脚部L/4残存。	
2	底面近	土師器 壺	[194]	-	(16.9)	白色・黒色粒	に赤い橙色	外面：U3脚部・茎部継縫ナメと留イキニ。脚上半斜傾ヘラケズリ。 脚下半吸付ヘラケズリ。 内面：ナデ。	U3脚部・脚部L/4残存。	
3	底面	土師器 壺	[178]	3.3	26.6	白色・黒色粒	株・黒色粒 内：に赤い橙色 内：に赤い橙色	外面：U3脚部・茎部継縫ナメと留イキニ。脚上半斜傾ヘラケズリ。 脚下半吸付ヘラケズリ。 内面：ナデ。	1/3残存。	

3区

3区 W - 1

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	形態、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	底面	染付 网	-	-	(1.2)	夷跡物なし	青灰色	内外面施塗。	削下半部片。
2	底面	土師質 かわらけ	[13.3]	[8.0]	2.7	白・黒色粒	に赤い橙色	外面：ロクナデ。腰部斜傾あ切り（密密）。	U3脚～脚部下半部片。
3	覆土	土師質 かわらけ	[14.4]	[7.9]	3.4	周・黒色粒	に赤い褐色	内面：ロクナデ。底面斜傾転角切り。	U3脚～脚部下半部片。
4	中位	陶器 織錦	[28.8]	-	(2.7)	白・灰白色粒	暗赤褐色	内外面に施塗の施す施塗。	U3脚片。大業第4段階（16c末～17c初）。
5	底面	瓦質 織錦	-	[15.3]	(6.4)	白・灰白色粒	灰褐色	外面：ナデ。面上に整然の筋路有り。 内面：ナデと鋤目。全体的に摩滅しており、底部付近が剥落。 微小な鋤目が残る。	削～底部片。15世紀前半～中期。
6	覆土	瓦質 織錦	-	-	(9.8)	黑・灰白色粒	灰褐色	外面：ナデ。裏が付糸。 内面：上部はナデ。下部は斜方向のすりこ木綿。摩滅して微かに鋤目が残る。	削下半部。15世紀前半～中期。
No	出土位置	種別	長さ(cm)	笠部径(cm)	鉢幅(cm)	材質	重さ(g)	特徴	残存状況、備考
7	覆土	銅製品 笠鉢	1.94	0.95	0.29	鋼	1.0	鉢先端部は平坦に失る。	先端部欠け。
No	出土位置	種別	長さ(cm)	笠部径(cm)	鉢幅(cm)	材質	重さ(g)	特徴	残存状況、備考
8	覆土	石製品 石臼	(137)	(9.1)	(8.8)	安山岩	11965	上・下面共に滑らか、上面は凸状を呈す。溝は確認できず。	上臼。磁片。
9	底面	石製品 石臼	(137)	(10.8)	100	安山岩	14350	臼盤径約25.0cm、物入れ直徑約14.0cm。 臼面はよく擦られ迹からで。溝は残存する。	下臼。磁片。

3区 D - 2

No	出土位置	種別	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	材質	重さ(g)	該種名・国名・初購年代	残存状況、備考
1	覆土	銅製品 鋼鏡	2.3	0.7	1.5	鋼	1.4	不明。鉢化が酷く判読不可。	完存。 表面鉛化が進んでいる。

3区 D - 3

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	形態、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	底面	青磁 网	-	-	(2.4)	夷跡物なし	オリーブ灰	内外面均均。全体に被焼し釉面が剥げていて。 外表面施塗成：U3脚部に青磁帯有。 内表面施塗成：なし。	U3脚部片。削C 2・3類。

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
2	底面	染付 遊戯模	-	-	(1.0)	夾織物なし	青灰色	内外面施錦。 外面文錦構成：口縁部に1条の界線。 里面文錦構成：口縁部に横文か。	底B型（15世紀中頃）か。 口縁部分。
3	底面	土師質 かわらけ	-	[6.0]	(1.2)	褐・黒色粒	にぶい赤褐色	内面外面：ロクロナダ。底部板目状圧痕。	底部片。

3区 D - 5

No	出土位置	種別	最大径(cm)	穿孔径(cm)	厚さ(cm)	材質	重さ(g)	特徴	残存状況、備考
1	覆土	石製品 白玉	1.01	0.29	0.43	滑石	03	表面及び裏面は滑磨により滑らかで、裏面には凸凹が認められる。未製品或いは欠損か。	ほぼ完存。

3区 D - 6

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 小皿	-	5.3	(1.2)	黑色粒	浅黄褐色	内面外面：ロクロナダ。底部板目状痕。	底部分。11世紀か。
No	出土位置	種別	長さ(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	胎土	重さ(g)	特徴	残存状況、備考
2	覆土	土師品 箕口	[12.0]	[6.3]	2.1	白・黒・褐色	3292	手づくね整形後、ヘラ・削ナダ調整。	先端部残存。

3区 P - 13

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 かわらけ	-	[7.8]	(2.2)	褐色粒	にぶい褐色	内外面：ロクロナダ。底部斜削あ切り。	胴下半～底部片。
2	覆土	土師質 かわらけ	-	[8.0]	(2.7)	褐色粒	にぶい褐色	内外面：ロクロナダ。	胴下半～底部片。
3	覆土	土師質 かわらけ	[14.0]	[8.6]	2.6	赤・黒色粒	にぶい褐色	内外面：ロクロナダ。	口縁～胴下半部片。

3区 P - 14

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 かわらけ	-	[8.8]	(0.8)	赤・黒色粒	にぶい褐色	内外面：ロクロナダ。底部斜削あ切り（縮窓）。	底部分。

3区 P - 29

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 かわらけ	-	[7.9]	(1.6)	褐色粒	浅黄褐色	内外面：ロクロナダ。底部斜削あ切り。	胴下半～底部片。
2	覆土	土師質 かわらけ	-	[10.0]	(1.2)	褐色粒	にぶい褐色	内外面：ロクロナダ。底部斜削あ切り。	胴下半～底部片
3	覆土	土師質 かわらけ	-	[5.0]	(0.9)	褐色粒	浅黄褐色	内外面：ロクロナダ。底部斜削あ切り。	胴下半～底部片

3区 P - 37

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 かわらけ	-	[15.6]	(10.6)	2.4	褐色粒	浅黄褐色	内外面：ロクロナダ。
2	覆土	土師質 かわらけ	[7.7]	[6.0]	1.8	黑色粒	灰黃褐色	内外面：ロクロナダ。	口縁～底部分。

3区 P - 47

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 かわらけ	-	[8.4]	(0.8)	褐色粒	浅黄褐色	内外面：ロクロナダ。底部斜削あ切り。	底部分。
No	出土位置	種別	外径(cm)	穿孔径(cm)	厚さ(cm)	材質	重さ(g)	瓶底名・国名・初跡年代	残存状況、備考
2	覆土	陶製品 脱脂	2.2	0.7	1.31	陶	16	不明。鉢化が懐く復元不可。	完存。 表張器化が進んでいる。

3区 P - 53

No	出土位置	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	色調	器形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師質 かわらけ	-	[5.5]	[0.9]	黑色粒	浅黄褐色	内外面：ロクロナダ。	底部分。

3区遺構外

No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	图形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
1	調査区	灰釉陶器 小瓶	[10.8]	[6.7]	22	白色粒	灰色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、高台を付ける。内外面施釉。	1/4残存。大瓶 2号堂式（10世紀前半）。
2	調査区	土師質 高台瓶	-	-	[2.9]	赤・褐色粒	に赤い橙色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、高台を付ける。	底部一高台部分。10世紀後半～11世紀前半。
3	調査区	土師質 高台瓶	-	-	[1.9]	赤・褐色粒	浅黄橙色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、高台を付ける。	調下平部片。10世紀後半～11世紀前半。
4	調査区	土師質 高台瓶	-	[8.0]	[2.7]	褐・黑色粒	に赤い橙色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、高台を付ける。	調下平一底部分。10世紀後半～11世紀前半。
5	調査区	土師質 高台瓶	-	[7.6]	[2.5]	赤・黑色粒	に赤い橙色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、高台を付ける。	調下平一底部分。10世紀後半～11世紀前半。
6	調査区	土師質 高台瓶	-	[8.0]	[3.1]	褐・黑色粒	浅黄橙色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、高台を付ける。	調下平一底部分。10世紀後半～11世紀前半。
No	出土位置	種別	貯さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	胎土	色調	图形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
7	調査区	瓦 平瓦	[13.4]	[12.5]	25	褐・黑色粒	灰白色	凹面布目。凸面ナデ。	破片。
No	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	图形、成・整形、文様の特徴	残存状況、備考
8	調査区	白磁 瓢反瓶	-	-	[2.2]	肉健物なし	白色	内外面施釉。内外面：回転ロクロナデ。内面見込みに段を有する。	直C I群（15世紀後半）。L3壁一群部片。
9	調査区	白磁 瓢反瓶	-	-	[2.6]	肉健物なし	青灰色	内外面施釉。	直B I群（15世紀後半）。L3壁一群部片。
10	調査区	陶器 天目茶碗	-	-	[2.2]	黑色粒	灰色	内外面に鉄錆を施す。	口縁部片。
11	調査区	陶器 天目茶碗	-	-	[3.6]	黑色粒	灰色	内外面に鉄錆を施す。外面下部は施釉せず。	調下平部片。
12	調査区	土師質 小瓶	[10.2]	5.9	25	長石・黒色粒	浅黄橙色	内外面：ロクロナデ。底部赤切り後、被目状压痕。	1/3欠損。11世紀か。
13	調査区	土師質 小瓶	[10.1]	[5.2]	21	長石・黒色粒	浅黄橙色	内外面：ロクロナデ。底部被目状压痕。	1/4残存。11世紀か。
14	調査区	土師質 小瓶	[9.4]	[6.0]	23	褐色粒	浅黄橙色	内外面：ロクロナデ。底部板状压痕。	1/3残存。11世紀か。
15	調査区	土師質 小瓶	[11.9]	[7.5]	29	長石・黒色粒	浅黄橙色	内外面：ロクロナデ。底部削切。	1/4残存。11世紀か。
16	調査区	土師質 小瓶	[9.1]	[6.5]	16	褐色粒	に赤い褐色	内外面：ロクロナデ。底部削切。	1/8欠損。11世紀か。
17	調査区	土師質 培植	[23.9]	[22.5]	27	白・黑色粒	に赤い褐色	内外面：ロクロナデ。	口縁部片。
No	出土位置	種別	外径 (cm)	内径 (cm)	厚さ (cm)	材質	重さ(g)	種類名・国名・初唐年代	残存状況、備考
18	調査区	銅製品 銅鏡	2.3	0.7	1.3	銅	25	元春通宝・北宋・1078年	完存。

VI 発掘調査の成果と課題

元総社蒼海遺跡群（130）の発掘調査において得られた成果から特徴的な造構について検討を行ってみたい。

1 土塚墓

（1）1区 DB-1号土塚墓

1区 DB-1は長方形の土塚、隅部から木片を伴う釘が出土したことから、釘を用いて組み立てられた木棺を埋葬した土塚墓と考えられる。県内で確認された木棺墓は数例あり、鉄釘の出土位置から木棺の規模を推定復元を行っている。下東西遺跡では棺の長さ1.1～1.2m、幅約0.35m。清里長久保遺跡では棺の長さ1.8～1.9m、幅約0.5mと推測している。近年では大牛中原遺跡（富岡市）で平安時代の木棺墓が確認され鉄釘の出土位置から約1.7m程の木棺であったと推定している（富岡市2016）。Fig.29は釘の出土位置から推定した木棺の復元図である。土塚北側は搅乱により消失しているが、底面に設置されている台石と土塚との配置の比率から土塚の規模を復元した。土塚の全長は1.68m程であったと考えられる。鉄釘が土塚裏面近くから出土していることから考えると、土塚の大さきがほぼ木棺の大きさであると推測され、それから想定される木棺の規模は全長1.58m、幅0.52m、高さ0.44mである。

本造構の特徴として底面に2列の石が配されていることが挙げられる。これは木棺を平衡に保つために配置された台石であると考えられる。⁽⁴⁾ 同様の構造を持つ土塚墓は県内では舞臺遺跡（堀ノ内遺跡群、藤岡市）のみでしか確認できない。市川橋遺跡（宮城県多賀城市）では9世紀後半頃の集団墓地から21基の木棺墓を検出。うち10基の木棺下から1～3本の縱木・横木が出土しており、台石同様に木棺の平衡を保つために配置されたと考えられている。方法は様々であるが木棺を平衡に安置しようとする行為から、埋葬者への気遣いを窺い知ることができる。

（2）2区 DB-1号土塚墓

2区で確認された古代の横位合口壺棺墓は全国でも類例がみられる。沼山源喜治氏は東日本での出土事例を集め、棺に用いられる壺は専用のものではなく、集落跡から一般的に出土する煤焦げた転用品が多いと報告している（沼山1981）。また棺の大きさ・口径からみて幼児の埋葬に用いられたと想定、東日本における横位合口壺棺墓の年代を「近畿地方のものより一時期後れた9・10世紀頃のものと考えられ、現在のところ8世紀代に遡るものは一例もない」としている。東日本埋蔵文化財研究会にて報告された東日本各地での横位合口壺棺墓の共通点をまとめると、①楕円形あるいは長楕円形の土塚に埋納されている。②棺内には火葬骨は発見されず土葬の可能性が高い。③土器の年代観は9世紀～10世紀に位置付けられる、として沼山氏の報告とはほぼ相異なる結果となっている。横位合口壺棺墓は平城京内でも確認されており、三重県では8世紀代の壺棺墓が検索されている。9世紀代に東日本で出現していることから、8世紀頃に都（平城京）から東日本へと横位合口壺棺墓という埋葬行為が伝播していったと考えられる。

全国的にみても棺内から人の骨・歯が出土することは稀で、田端遺跡（高崎市）と山王遺跡（宮城県多賀城市）

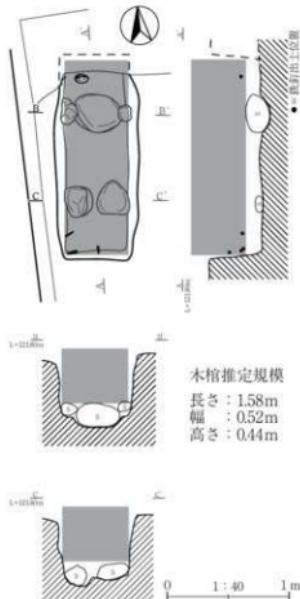


Fig.29 1区 DB-1号土塚墓木棺推定復元図

の2例のみである。両遺跡とも棺内から幼児の歯が出土しており、幼児を埋葬していたと報告している。

2区DB-1は平面プランは楕円形と推定、棺内には火葬骨は存在せず、人の骨・歯も検出されていない。使用された土器は9世紀代の土師器壺である。以上の事から2区DB-1は東日本で多く確認されている横位合口壺棺墓と同じ傾向であることが言える。

2 蒼海城の堀

(1) 1区W-1号堀

1区W-1は底面・形状等の確認ができなかったものの、周辺遺跡での確認状況から元総社蒼海遺跡群(26)5・6区のW-2と元総社蒼海遺跡群(35)1区のW-1との交差点にある部分であると考えられる。

元総社蒼海遺跡群(26)5・6区のW-2(以下(26)W-2)は上幅4.40m、下幅0.28m、深さ3.82mの断面が薬研の形状を呈する堀跡である。北側への延伸部分を見ると、5区より北に位置する元総社蒼海遺跡群(41)では同様の堀は確認されていない。そのため、その間で方向を転換していると考えられる。転換部付近から西にあたる小見遺跡では堀は確認されていない。東側では小見Ⅲ遺跡3区でW-1がある。この堀は確認上幅5.0m、深さ3.15m、深い薬研状と(26)W-2と同様の規模であるため、これに接続すると考えられる。90度東へ曲がった堀(Fig.11)は小見遺跡3区で南側へ屈曲し堀は止まっている。

元総社蒼海遺跡群(35)1区のW-1(以下(35)W-1)は上幅7.59m、下幅4.10m、深さ1.27~1.46mの断面形状は幅広の逆台形を呈する堀跡である。底面が平坦、深さも1.5m前後と浅い事から堀底道の可能性が高いと考えられている。元総社蒼海遺跡群(35)1区の東側に位置する小見遺跡5区W-3(上幅4.14~6.30m、深さ0.85~1.30m)がこの堀の東側延伸部にあたる。さらに東へ行くと元総社蒼海遺跡群(2)8トレンドで同形状の堀が確認されている。西側では小見遺跡W-1がこの堀にあたると考えられる。さらに西側の延伸部分には蒼海城絵図に「五ノ俵」と記されている染谷川の渡河点が比定されている場所があり、蒼海城への登城口のひとつと想定されている。この事から、この堀が蒼海城の中心へと続く道(堀底道)であったと考えられる。さらに、この堀には元総社蒼海遺跡群(20)で確認されている南北に走向する堀と元総社蒼海遺跡群(26)7区で確認されている南北に走向する堀がそれぞれ直結する。両方とも断面形状が逆台形を呈しており、(35)W-1と同様に堀底道と想定される。

深い薬研状の堀(防衛)と浅めの深さを持つ堀底道(交通)という異なる役割を持った2つの堀が交差することがわかった。これを踏まえて本遺跡1区W-1の状況を考えて見たい。1区W-1は地表面から約2m下までの調査を行った。底面は確認されなかったため(26)W-2の深度(約4m)まで掘下げられていると想定できる。南側の立ち上がり部分については、東から延びる(35)W-1の南側立ち上がりラインに沿っているため、この部分については(35)W-1を踏襲していると考えられる。つまり(26)W-2は(35)W-1のライン上まで掘り止められている事がわかる。(26)W-2に切られた(35)W-1は西側へと続く

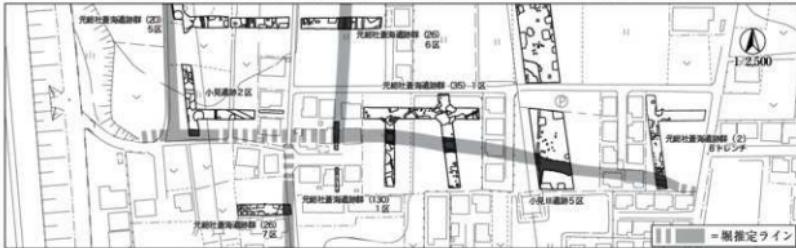


Fig.30 1区周辺の蒼海城に関する堀(2)

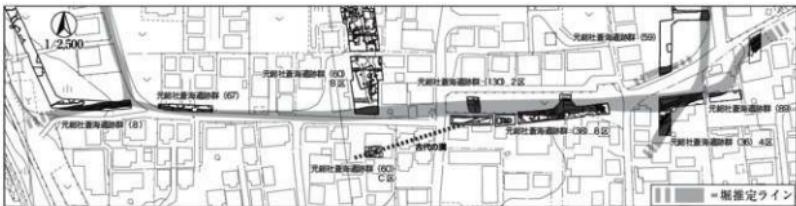


Fig.31 2区周辺の蒼海城に関連する堀

と考えられるが、このままでは道として機能しないことから1区W-1周辺に橋等の施設が架かっていた可能性が想定される。「蒼海城絵図」では1区周辺は蒼海城の登城口の「五ノ俵」から続く通路上にあたり、蒼海城の北東側外縁部の重要な場所のひとつであったと推測される。そのため(26)W-2等の深い堀を穿ち、堀底道を遮断して複雑な構造にすることにより、防御面での強化を図ったものと考えられる。

(2) 2区W-1号堀

2区北側調査区で確認された東西方向に延びる堀である。北側の立ち上りから浅く落ち込み、1.5m幅のテラス状の段を持ち、そこから堀底へ向かって下がっている。堀の中心と南側の立ち上がりは調査区外のため確認に至っていない。2区の東に隣接する元総社蒼海遺跡群(38)8区W-1がこの堀の東側延伸部にある。上幅7.40m、下幅3.30m、深さ1m、断面形状逆台形を呈する。さらに東の元総社蒼海遺跡群(36)4区と元総社蒼海遺跡群(89)と続き、屈曲して北東方向へと延びている。本遺跡2区から西へ50mに位置する元総社蒼海遺跡群(60)B区でこの堀の西側延伸部が検出されている。元総社蒼海遺跡群(60)B区W-1は北側の立ち上がり部のみの確認である。上幅(2.83)m、下幅(0.60)m、深さ1.36m、断面逆台形を呈する。さらに西側へ行くと、元総社蒼海遺跡群(67)では北側の立ち上がりのラインのみ確認されている。元総社蒼海遺跡群(8)ではW-1として確認されており、上幅4.25m、下幅2.60m、深さ1.10m、断面形状逆台形を呈している。また北東隅で北側からの堀(元総社蒼海遺跡群(26)7区から延びる堀底道)と接続している。

堀全体を見ると染谷川近くの元総社蒼海遺跡群(8)から元総社蒼海遺跡群(36)4区までの約350mの距離を直線的に走向している。深さは1.0~1.5mと浅く、断面形状が逆台形ということもあり、堀底は比較的平坦に近い。以上の事から、この堀は堀底道として使用されていた可能性が考えられる。元総社蒼海遺跡群(8)W-1の西側の先には染谷川が流れおり、「蒼海城絵図」ではこのあたりを「四ノ俵」と記し染谷川の渡河点に比定されている。この渡河点に通ずる道がこの堀底道ではないかと考えられる。

(3) 3区W-1号堀

3区の北側で確認された。東側に隣接する元総社蒼海遺跡群(21)27地点ではこの堀の延長部分は確認されていない為、両遺跡間で堀が止まるか、北か南へ方向転換していると考えられる。3区は蒼海城二の丸に比定されている場所である。本遺跡3区と隣接する元総社蒼海遺跡群(21)27地点と元総社蒼海遺跡群(23)24地点で確認されているビット群(3遺跡合わせて約760基)は二の丸に構築された掘立柱建物跡の柱穴と推測され

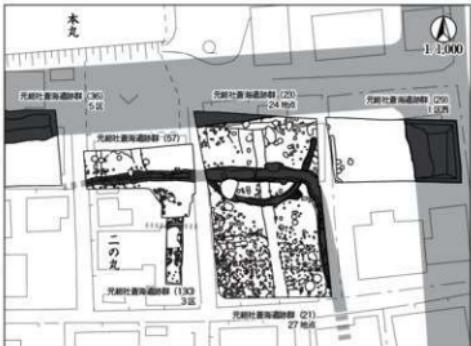


Fig.32 3区周辺の蒼海城に関連する堀

る。3区W-1はこれらの建物や空間を区切る為の堀であったと考えられる。

堀は出土遺物から17世紀初頭には埋没していたと想定される。1610年頃には蒼海城が廃城しているため、近い時期にこの堀も人為的に埋められ、堀としての機能を失ったと考えられる。

3 3区出土遺物

3区は蒼海城の二の丸に比定される場所である。出土遺物は概ね蒼海城の時期に帰属するものが大半を占めている。ここではその中から主要な出土遺物について検討してみたい。

(1) 貿易陶磁器類

染付が3点出土している。3区D-3(2)は端反碗の口縁部片で碗B類(15世紀中頃)、3区遺構外(9)は端反皿の口縁部片で外面に唐草、内面に雷文が施されており皿B群(15世紀後半)に比定される。

3区D-3(1)は青磁碗の口縁部片で内外面の施釉に被熱痕跡がみとめられる。外面には雷文と思われる文様が見られる。碗C2類(15世紀前半)か碗C3類(16世紀前半)に比定される。被熱した陶磁器類は東に隣接する元総社蒼海遺跡群(21)27地点でも多く出土している。

3区遺構外(8)は白磁の端反皿であり、皿C1群(15世紀後半)に比定される。

(2) かわらけ

小片ばかりではあるが3区出土の中世遺物の大半を占めている。その中で3区W-1(2)は秋本太郎氏のかわらけ分類(秋本2005、秋本2012)でA類2群^[10]に適合すると考えられる。同じ形式のかわらけは東に隣接する元総社蒼海遺跡群(21)27地点・元総社蒼海遺跡群(23)24地点からも出土しており、15世紀後半の年代が与えられている。本遺跡出土のかわらけ片も同様の時期を示すものと考えられる。

(3) 捣鉢

3区W-1から3点出土している。(5)と(6)は堀底から出土しており、共に瓦質で内底部の摩滅が顕著、僅かに鉄目が確認できる。在地産の捣鉢と考えられる。上野の在地産鉢については木津博明氏によって分類・編年が行われている(木津1989)。この分類によれば鉄目の出現は15世紀前半から中頃であり、「鉄目が顕著なものほど新しい要素」であると推定し、「顕著な状態で施すのは15世紀後半に至ってから」としている。出土した捣鉢は鉄目は実使用されたこともあって摩滅しているが、鉄目はやや小さく不規則に施されている印象を受ける。以上の事から、鉄目を施し始める15世紀前半から中頃の捣鉢であると推定したい。

(4)は堀の中位から出土している。胎土・器形から瀬戸美濃窯の大窯第4段階(16世紀末から17世紀初頭)の捣鉢と考えられる。

註

- (1) 下東西道路SZ16土塙墓。遺物の年代から9世紀後半としている。
- (2) 清里長久保道路1号土塙墓。共伴遺物の銀鏡・灰釉陶器から10世紀中葉から後半としている。
- (3) 木棺の高さは現代の棺の一般的な規格(長さ180×幅0.68×高さ0.41m)の比率から算出している。あくまでも参考値。
- (4) 底部に石を据えるその他の墓間連の遺構として火葬跡が挙げられる。底面に据えられた石は木棺を支えるためのもので、火葬時に木棺底面にも火が回り易いようにする役割がある。しかし本遺構内では被熱痕跡や焼土・炭化物等は確認されていない。また土壤自体が木棺の大きさギリギリであるため火葬行為が容易でないことがから本遺構が火葬跡でないことが言える。
- (5) 舞姫遺跡GD-20号土塙。長さ202、幅0.75mの廣丸長方瓶。円窓を2個づつ3列に配置している。9世紀。
- (6) 東日本埋蔵文化財研究会 1995『東日本における奈良・平安時代の墓制・墓制をめぐる諸問題ー』第5回東日本埋蔵文化財研究会
- (7) 土器埋納遺構として4基検出。人間に因襲する施物類を検出しており、小児埋葬の可能性が高いと報告。(古文研1997)
- (8) 固体の羽筆を合せ口にした「羽筆棺」が出土。棺内には母乳期あるいは少年期の歯が残存しており、火葬でない可能性が高い。10世紀後半。
- (9) ロクロ土器器長胴刺3点を追加した更棺蓋が出土。棺内から2歳程の幼児の歯と骨小片が検出された。土器器蓋の時期は9世紀前葉。
- (10) A類:扁平な皿型で体部は外傾する。底部は平らで、体部下方から上方にかけては同じ厚さで背手。2群:直線的に外傾。口唇部は尖る。(秋本2008)



1区北側調査区全景（南から）



1区南側調査区全景（北から）



1区H-1号住居跡全景（北西から）



1区H-1号住居跡No.1出土状況（北から）



1区H-2号住居跡全景（北西から）



1区H-2号住居跡粘土地全景（北西から）



1区H-3号住居跡全景（南から）



1区W-1号掘北側部分（北東から）



1区W-1号掘全景（北から）



1区DB-1号土壙墓全景（東から）



1区DB-1号土壙墓釘出土状況（北東から）



2区H-1号住居跡全景（北東から）



2区H-1号住居跡全景（東から）



2区W-2号溝全景（北東から）



2区W-1号堀全景（北東から）



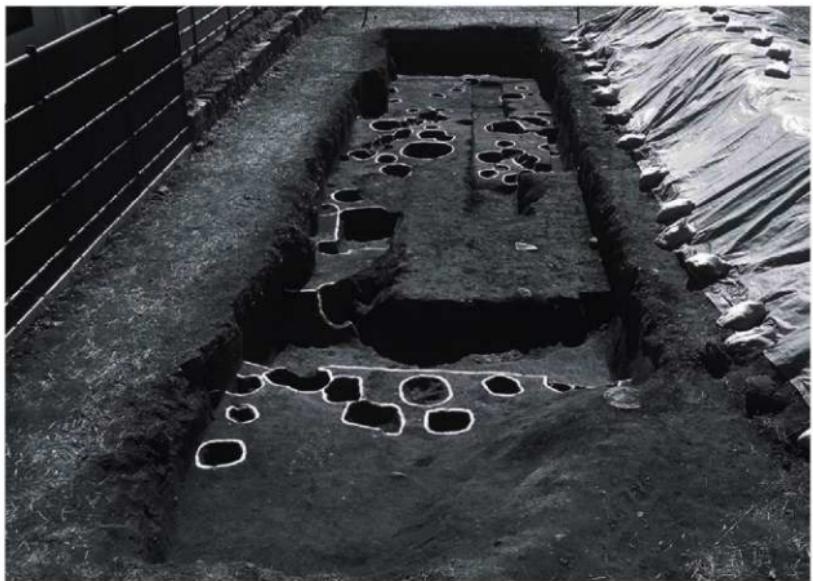
2区DB-1号土塙墓全景（北から）



2区DB-1号土塙墓全景（西から）



2区A-1号道路跡全景（東から）



3区調査区全景（北から）



3区調査区全景（南から）



3区調査区全景（西から）



3区W-1号堀遺物出土状況（東から）



3区W-1号堀全景（東から）



3区D-3号土坑、P-29・57号ピット全景（西から）



3区D-6号土坑遺物出土状況（北から）



1区調査風景（北から）



2区調査風景（西から）

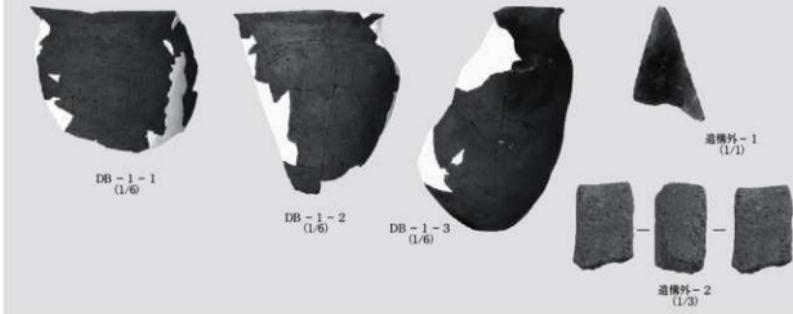


3区調査風景（北西から）

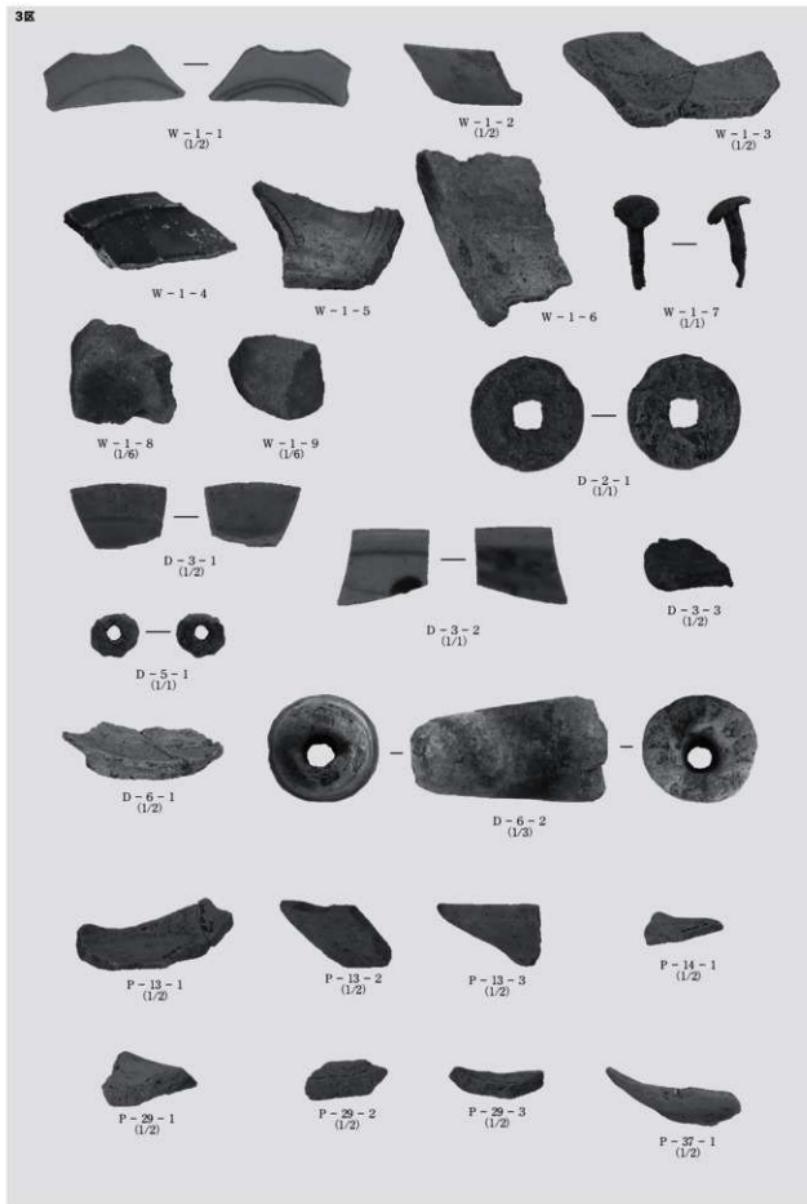
1区



2区



38





報告書抄録

ふりかな	もとそうじやおうみいせきぐん (130)
書名	元総社蒼海遺跡群 (130)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
発行年月日	2019年3月21日

ふりがな	ふりがな	コード	位置		調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
元総社蒼海遺跡群 (130)	前橋市元総社町 1392-9ほか	102021	30A238	36°23'6	139°1'58"	20180910 ～ 20181031	505.20 m ²	前橋都市計画事業 元総社蒼海地区 画整理事業

所収遺跡名	調査区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海遺跡群 (130)	1区	集落	平安時代 中世	竪穴住居跡 土壙墓 ビット 堀跡	3軒 1基 3基 1条	土師器 須恵器	・蒼海城に関連する堀底道 ・10世紀代の木棺墓
	2区	集落 城館	平安時代 中世 近世～近代	竪穴住居跡 土壙墓 溝 ビット 堀跡 道路状遺構	1軒 1基 1条 1基 1条 1条	土師器 須恵器 陶磁器	・蒼海城に関連する堀底道 ・9世紀代の合口土器棺墓
	3区	城館	中世・近代	堀跡 土坑 ビット	1条 6基 63基	白磁 青磁 染付 かわらけ	・蒼海城二の丸の建物ビット群 ・蒼海城に関連する堀

元総社蒼海遺跡群 (130)

前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019年3月10日 印刷
2019年3月21日 発行

発行

前橋市教育委員会

〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社